

熊本地震被災外国人シングルマザーに対する インタビュー調査



コムスタカー外国人と共に生きる会

熊本地震被災外国人シングルマザーに対するインタビュー調査

はじめに

コムスタカ-外国人と共に生きる会	2
------------------------	---

2016年熊本地震	2
-----------------	---

熊本地震被災外国人シングルマザーに対するインタビュー調査

背景	4
----------	---

調査について

目的・対象・方法	5
----------------	---

調査結果

調査参加協力者の背景	6
------------------	---

14日震災	7
-------------	---

16日震災	9
-------------	---

避難場所	10
------------	----

避難生活での困難

生活全般	12
------------	----

子どもに関して	14
---------------	----

シングルマザーとして	16
------------------	----

外国人として	17
--------------	----

情報	18
----------	----

住宅	20
----------	----

震災における外国人シングルマザーと情報	21
---------------------------	----

震災における外国人シングルマザーと仕事	23
---------------------------	----

それぞれのストーリー	25
------------------	----

課題と提言	39
-------------	----

震災時の多文化共生～今後に向けて～

熊本地震とコムスタカの外国人被災者救援・支援の取組み	43
----------------------------------	----

熊本地震の被災体験から見えてきた災害時の多文化共生の課題と提言	49
---------------------------------------	----

追記：行政の地域防災計画の見直し

平成29年度熊本県地域防災計画の修正	52
--------------------------	----

平成29年度熊本市地域防災計画の修正	53
--------------------------	----

コムスタカ-外国人と共に生きる会

熊本地震外国人被災者救援・支援活動 収支報告	55
------------------------------	----

熊本地震被災外国人シングルマザーに対する インタビュー調査

コムスタカー 外国人と共に生きる会

はじめに

コムスタカー 外国人と共に生きる会

コムスタカー外国人と共に生きる会は、1985年9月に熊本市中心部にある手取カトリック教会を連絡先にアジアから日本に働きに来ている女性の相談や支援を行うNGO「滞日アジア女性の問題を考える会」として発足しました。

その後相談者の国籍や相談内容の多様化を受け、1993年4月から「コムスタカー外国人と共に生きる会」に改称し、2013年3月から連絡先を熊本市内にある須藤眞一郎行政書士事務所に変更して現在に至っています。

在住外国人のための無料の人権相談、生活自立支援、移住(労働)者問題等の講演会や映画会等の啓発活動、行政等に対する外国籍住民への施策の提言、民事や刑事事件など外国人の訴訟の支援活動等を行っています。コムスタカーは、フィリピン語で、「お元気ですか」という意味です。

2016年熊本地震

1. 熊本地震と被災状況

2017年4月14日現在気象庁の発表によると、2016年4月14日熊本地震発生以降、4月14日と16日の震度7を最高に、震度6＝5回、震度5＝17回、震度4＝117回、震度3＝410回、震度2＝1,168回、震度1＝2,577回となっており、震度1以上の地震回数は、4,296回に達している。

2017年6月22日現在の熊本県集約分であるが、熊本地震による直接災害死は50名、震災関連死が179名、大雨による二次災害死5名の合計234名、負傷者2,704名、仮設及びみなし仮設での孤独死6名、被災建物住宅19万2,904棟に上る。提供された仮設住宅4,303戸、みなし仮設住宅(提供予定)1万4,600戸、入居申請者数1万5,928戸で、2017年4月末現在、仮設住宅やみなし仮設住宅の居住者数4万7,618人となっている。2017年6月現在においても行政による審査と認定が続いていることもあり、震災関連死数と負傷者数、被災住宅数は増大し続けている。

2. 熊本地震による被災の特色と在住外国人

熊本地震は、以下のような特色があった。

- ① 4月14日夜と16日深夜の2度の最大震度7の揺れを頂点に、地震の揺れが長期的に継続していた。
- ② ライフライン（水道・ガス）の回復が遅れ、緊急避難が2週間から1ヶ月以上の中長期になったことに加え、建物の中に入るのが怖いといった心理面での影響も非常に大きく、膨大な数の屋外避難者が生まれた。
- ③ 被災地が、熊本市、合志市、菊陽町や大津町など菊池郡、益城町や御船町など上益城郡、西原村や南阿蘇村など阿蘇地域、宇城市、宇土市、八代市など県南地域と断層帯沿いに熊本県内だけでも100キロ以上に及ぶ広範囲であり、被災状況が多様であった。

熊本地震被災者のなかには、災害弱者としての外国人被災者も含まれている。観光客等の訪日外国人だけでなく、熊本県内には、2015年12月末現在、3ヶ月を超える中長期在留外国人登録者数が10,767人いた。おそらく、少なくともその5割以上（5,000人以上）が、熊本地震の被災者になったと思われる。

熊本地震の震度と回数	
震度 7	2回
震度 6	5回
震度 5	17回
震度 4	117回
震度 3	410回
震度 2	1,168回
震度 1	2,577回
震度 1以上の地震回数	4,296回

2017年4月14日現在・気象庁発表

熊本県の被災状況	
直接災害死	50名
震災関連死	179名
大雨による二次災害死	5名
合計	234名
負傷者	2,704名
仮設及びみなし仮設での孤独死	6名

被災建物住宅	19万2,904棟
提供された仮設住宅	4,303戸
みなし仮設住宅（提供予定）	1万4,600戸
入居申請者数	1万5,928戸

2017年6月22日現在・熊本県集約分

仮設住宅・みなし仮設住宅の居住者数 4万7,618人

2017年4月末現在

熊本地震被災外国人シングルマザーに対するインタビュー調査

背 景

法務省入国管理局の在留外国人統計によると、熊本県内には、2015年12月末時点で、3ヶ月を越える中長期滞在者が1万人を超え、熊本県人口178万人の0.6%を占める外国人が住民として暮らしている。性別では、女性が6,827人(63%)、男性が3,940人(37%)で、女性が多いことが熊本の外国籍住民の特色である。

国籍別で見ると、多い順に、①中国4,195人、②ベトナム1,610人、③フィリピン1,607人、④韓国・朝鮮籍998人、⑤アメリカ合衆国319人、⑥台湾239人、⑦インドネシア227人、⑧ネパール221人、⑨タイ210人、⑩カンボジア114人である。

在留資格別では、多い順に①「技能実習」3,458人、②「永住者」2,869人、③「留学」1,135人、④「日本人配偶者等」762人、⑤「特別永住者」526人、⑥「家族滞在」523人、⑦「技術・人文知識・国際業務」388人、⑧「定住者」291人、⑨「技能」187人、⑩「教育」142人の順である。「永住者」、「日本人配偶者等」、「定住者」の在留資格者数は、合計3,923人で、熊本県内の外国籍住民の3分の1強(36%)を占めている。上位3つの在留資格者のうち、結婚により移住した外国人女性が多くを占めていると思われる。また、これら結婚による移住女性の中には、その後、別居や離婚、死別、さらには未婚によりシングルマザーとなった女性も数多く存在している。

熊本県の国籍別在留外国人

① 中国	4,195人
② ベトナム	1,610人
③ フィリピン	1,607人
④ 韓国・朝鮮籍	998人
⑤ アメリカ合衆国	319人
⑥ 台湾	239人
⑦ インドネシア	227人
⑧ ネパール	221人
⑨ タイ	210人
⑩ カンボジア	114人

熊本県の在留資格別外国人

① 技能実習	3,458人
② 永住者	2,869人
③ 留学	1,135人
④ 日本人配偶者等	762人
⑤ 特別永住者	526人
⑥ 家族滞在	523人
⑦ 技術・人文知識・国際業務	388人
⑧ 定住者	291人
⑨ 技能	187人
⑩ 教育	142人

調査について

■ 調査目的

2016年熊本地震で被災した人々の中には、「災害時要援護者」である外国人も多く含まれ、その中にはシングルマザーも存在している。外国出身のシングルマザーは、情報弱者であり、日本人との繋がりが希薄であることが多く、孤立しがちである。本調査は、そんな外国出身のシングルマザー達が熊本地震での被災時及び避難生活において、どのような体験をしたのか、外国人としての困難、シングルマザーとしての困難はどのようなものがあつたのかを把握し、外国人シングルマザー特有の課題やニーズを抽出することで、今後の震災時における支援体制を中長期的に検討し、遂行することを目的とする。

■ 調査対象

調査対象者は、熊本県内に居住し、2016年熊本地震を経験した外国出身の者で、未婚、または離婚・死別によりシングルマザーとなった人を対象とした。また、子育て中の人のみではなく、現在は子どもと離れて生活している人や子育てが終了した人、別居中の人も含めた。

調査対象者の選定は、これまでコムスタカに関わったことのある人や、その知り合いに参加協力を依頼した。外国にルーツを持つ子どもネットにも参加対象者を紹介していただいた。またインタビューに協力していただいた人にも新たな参加対象者を紹介していただいた。

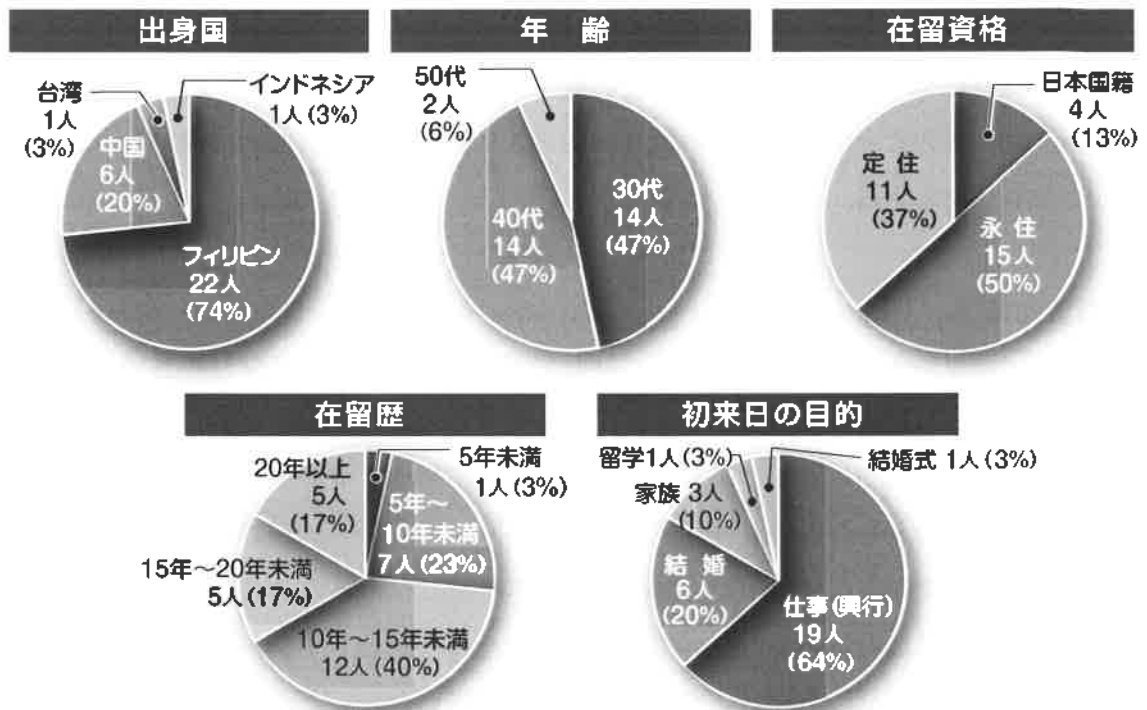
■ 調査方法

2016年7月から2017年1月にかけて、2016年熊本地震を経験した外国出身のシングルマザー30名にインタビュー調査を行った。インタビューは1時間から2時間程の長さで、全てを録音した。インタビューは基本的には日本語で行い（中国語通訳2名、英語1名、日本語と英語両方1名）、1名はカフェで、もう1名は面接者宅で、それ以外は対象者宅で行った。インタビュー終了時に義援金をかねて謝金1万円を支払い、必要に応じて被災者支援制度を含む社会資源情報の提供を行った。

調査結果

■ 調査参加協力者の背景

インタビュー調査で自身の体験を話してくれたのは、30歳から56歳まで（平均40.3歳）のフィリピン、中国、台湾、インドネシア出身の女性30名。日本在留歴は4年から35年（平均13.5年）で、既に10年以上日本に住んでいる人が多く、来日して5年以下は1名のみであった。



初来日の目的として、19名は仕事の為に興行ビザで半年間日本に滞在しており、その間に知りあった日本人男性と結婚。その他は、留学や、母や姉の育児の手伝いをする為に来日している際に、日本人男性と交際を始め結婚し移住した人や、高校生の時に帰国者として家族で日本に移住してきた人、結婚式の為に一度来日後しばらく母国で生活し夫の転勤を機に日本に移住した人、また母国で日本人男性と結婚後初めて来日した人もいた。

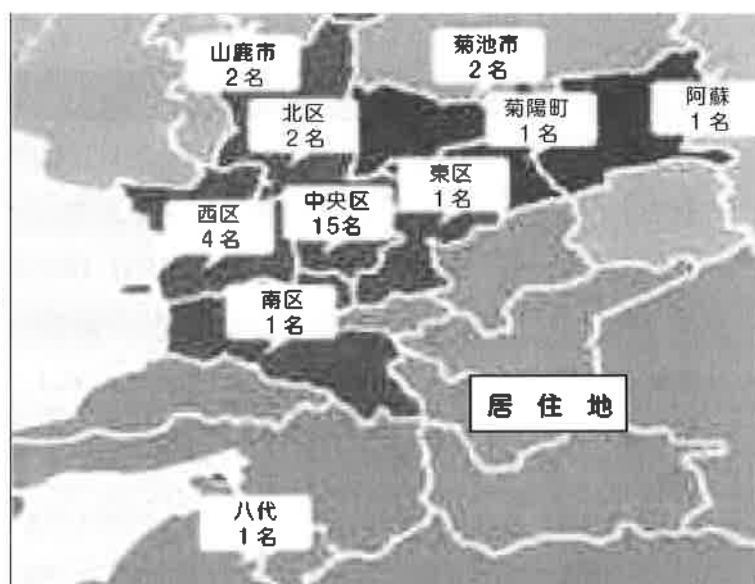


現在の世帯の形態として、母子世帯のみではなく、既に子どもが成長し別世帯で生活をしていたり、子どもは母国で家族と生活している等の理由で現在は単身世帯の人、またインタビュー時には母子だけではなく母や妹が短期滞在等で共に生活している人もいた。

現在一緒に住んでいる子どもの人数は平均1.1名で、12名は離れて暮らす子どもがいた。また、10名は現在結婚はしていないが交際相手がいた。21名は離婚によるシングルマザーで、3名は未婚で出産しシングルマザーとなり、5名は未婚の出産と離婚の両方を経験したシングルマザーであった。1名は家庭内別居で婚姻費用の請求等を係争中であった。また14名はDVやネグレクト等パートナーからの暴力が別れた原因と話した。

調査協力者は6自治体に居住しており、多くは熊本市中央区在住であった。熊本市内の他には、北は山鹿市、南は八代市在住であった。

被害の酷かった益城町在住の方にはインタビューを行うことができなかったが、同じく被害の酷かった阿蘇在住の方にインタビューすることができた。また1名は熊本市内在住だが、16日の本震時には阿蘇方面にて被災をしていた。

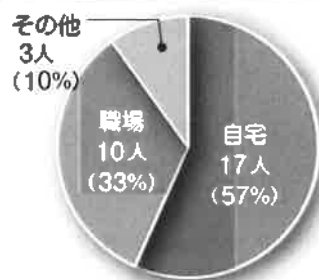


■ 14日震災

2016年4月14日21時26分、震度7の地震が熊本を襲った。発災時に17名は自宅にいたが、10名は発災時職場で仕事（ホステス）をしていた。そのうち5名は子どものみが自宅で留守番をしており、1名は子どもを保育園に預けていた。その他、発災時に子どもと友人と一緒にレストランで食事中だった人や子どもと一緒に翌日の遠足のおやつを買いに行っていた人、子どもは祖父母宅に泊まりに行き本人は自宅で一人で過ごしていたという人もいた。

誰も予想をしてい

14日発災時にいた場所



14日発災時にいた人



かった突然の揺れに、「何が起きているか理解できなかった」、「パニックになった」、「何をすれば良いか分からなかった」、「どこに避難すれば良いのかが分からなかった」等の声が多数聞かれた。また子どもと離れていた人は、「子どもと連絡が取れずにとっても怖かった」と話していた。

発災後、6名は震源から離れていることもあってか（山鹿・八代・菊陽・阿蘇・北区）、外に出ることもなくそのまま自宅にとどまっていた。4名は一度は自宅外に避難したものの、その日のうちに自宅に戻っていた。しかし、全体の3分の2にあたる20名は自宅とは別の場所に朝まで避難をしていた。避難所に避難した6名のうち4名は発災時に職場におり、一度自宅や保育所に子どもを迎えに行った後に職場の同僚と避難所に行き、そこで夜を過ごしていた。後の2名は自宅で被災し、近所の人に避難所に行くように教えられた。

14日避難先

自 宅	10名	「大したことはなかった」・「避難所は人が多かった」・「外に出るのが怖かった」
避難所	6名	「人に勧められた」・「一人でいたくなかった」・「同僚がネットで見つけた」
公園・グラウンド	5名	「人が集まっていたから」・「町内放送があったので」
車 中	5名	「車の方が安心だった」・「避難所が分からなかった」・「娘が迎えに来た」
家族・友人宅	3名	「連絡があった」・「一緒にいた」
福 岡	1名	「一緒に車中に逃げた友人家族と話し合った」

中国出身 Aさん

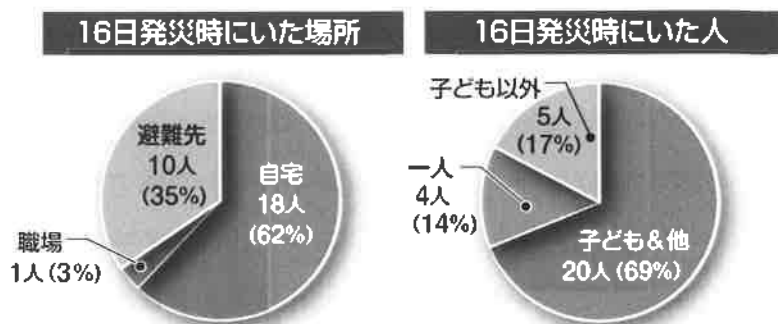
地震があった時には一人で子どもの遠足の買い出しをしていた。何が起ったか分からず怖くて動けなくなった。店内のワインが全部倒れて割れていた。子どもが一人で家にいたので、急いで帰ったら大声で泣いていた。台所の棚が倒れてお皿やコップも沢山割れて、テレビも倒れていた。団地横の公園に人が集まってブルーシートを敷き、そこで一晩過ごした。そこに食料や水、毛布等もあった。15日は家の片づけをした。もう地震は来ないと思い水や食料の買い出しはしなかった。

インドネシア出身 Bさん

子どもと自宅にいる時に地震が起った。子ども達の方が冷静でBさんがパニックになった。本当に死ぬかと思った。でも一番に考えたのは子どものこと。揺れが落ち着いて外に出たら、近所の人達も外にでていて少し安心した。揺れが酷かったら避難所に行った方が良いと教えてもらい、車で一緒に行きましょうと言われた。しばらくして家に戻り掃除をした。余震が起ることに外に出て朝まで眠れなかった。

■ 16日震災

4月16日午前1時25分本震発生。前日の発災時とは違い、職場での被災は1名のみで、18名は自宅での被災であった。10名は前日の地震により家族や友人宅（4名）や避難所（4名）、車中（1名）、福岡（1名）と、既に自宅以外に避難していた。子どもと同居している23名のうち20名は、発災時に子どもと一緒にいて、そのうち10名は子どもの他に家族や友人等も一緒にいた。1名は本震時も仕事をしており、子どもは一人で留守番をしていた。他2名は前日の震災で子どものみ避難所や祖父母宅へ避難していた。14日に熊本市内で被災し、他に行く当てもなく離婚した元夫宅に避難していて、そこで深刻な被害を受けた人もいた。



2度目の地震は規模も大きく、「外に逃げたいけど逃げられない」という恐怖や、死の恐怖を感じたと答えた人が多く、また実際に負傷した人もいた。また、前震時とは違い、DVの影響で外に出ることが怖いという1名以外は、全員が自宅以外に避難していた。16日の避難先として避難所に行った人は、前日にも避難所に行っていたり、友人知人が連れて行ったりして避難所にたどり着いていた。

16日避難先

避難所	9名	「友人や家族、元夫が連れて行った」
車 中	8名	「人が多く避難所に入れなかった」・「同僚や元夫が迎えに来た」
公園・避難所の外	8名	「近所の人から家に戻らないように言われた」 「避難所は人が多くて入れなかった」 「避難所も危ないので行かないように言われた」
友人宅	1名	「前日から避難していた」
自 宅	1名	「外に出るのが怖かった」
福 岡	1名	「14日の余震後から避難した」

中国出身 Cさん

前震後、息子や友人と避難所にいたが眠れずに23時頃に帰宅した。16歳の息子は避難所に友達がいたので避難所にとどまった。寝ようとした時に本震。パジャマのまま外にでた。子どもを一人にしていたので、もし自分が死んだら子どもはどうなるのかと不安で泣いた。外にでたらすぐに息子から電話があり、避難所も危ないので来ないようにと言われた。アパート前の公園に人が集まっていたのでそこでしばらく地震が治まるのを待ち、その後避難所へ向かった。

フィリピン出身 Dさん

15日は余震が続いて一人で不安だったので元夫に電話をして助けを求めた。元夫宅で夜寝ていたら本震が起きて天井が落ちてきた。停電で真っ暗闇の中、ガスの匂いもしてきて怖かったが、なんとか落ちてきた天井や倒れた家具の間を潜り抜けて外に出た。神様のおかげ。元夫は先に外に出ていた。顔を怪我して血だらけになっていたが痛みも感じず、怖いという気持ちよりも生きるのに必死という気持ちであった。その後避難所に向かった。その日の晩は死ぬならみんな一緒に思い、なんとか寝ることもできた。

避難場所

避難場所 (複数回答)

避難所	14名	「他に行くところがなかった」・「余震が続いていた」 「子どもが家に帰りたがらなかった」・「一人でいたくなかった」
車中泊	11名	「家で寝るのが怖かった」・「安心」・「人が多いのが苦手」 「日本人だらけの避難所は居心地が良くなかった」・「避難所のトイレが嫌だった」
家族・友人宅	10名	「避難所の生活がきつかった」
一時帰国	8名	「仕事もなかった」・「家族が心配していた」 「熊本の環境が子どもに良くないと思った」・「母が他界したため」
自宅	3名	「自宅の被害が少なかった」・「子どもの学校のため」 「人に迷惑をかけたくなかった」・「県外に避難するには費用が掛かるため」
宿泊施設	2名	「避難所は皆と一緒に嫌だった」・「子どもの体調が悪かった」 「日本人ばかりのところに子どもがいたがらなかった」
公園・避難所の外	1名	「避難所を出なければならなかった」

4月16日の本震後に、それまでの生活を継続することができた調査協力者はいなかった。16日本震後の翌日には自宅に戻った人もいるが、自宅への被害が酷かった人の中

には、半年近く避難生活を送っていた人もいた。16日以降の避難場所を尋ねたところ、約半数は避難所での生活を経験していた。熊本市国際交流振興事業団（以下KIF）が開設していた外国人向けの避難所に避難した人は1名のみで、多くは自宅近くの避難所に行っていた。また、避難が長期化し、避難所が閉鎖・統合されて、数ヶ所の避難所での生活を経験した人もいた。避難所での集団生活や衛生面が不安で、車中泊や友人宅等へ避難した人も少なくなかった。県内の他の地域へ避難した人が4名。8名は一時帰国し、1名は子どものみを一時帰国させていた。4名は日本人だけの避難所での居心地の悪さが理由で、外国人向けの避難所や別の避難先を選んでいった。

フィリピン出身 Eさん

自宅前の駐車場で車中泊をして過ごした。避難所は人が多すぎるのと、トイレが大変そうで行かなかった。震災が起こった時に、日本政府はまずは自国民を助けるのだろうと考えた。避難所よりも車中泊を選んだのは、自分たちの優先順位は低いだろうと思ったから。日本人ばかりのところにいるのもあまり居心地が良くないだろうと思った。国際交流会館が避難所になっていることは知らなかった。本当かどうか分からないけど、フィリピンへの帰国は費用負担がないと聞いた。その時は自宅のアパートが倒壊したら引っ越すお金もないし帰国しようと思った。

フィリピン出身 Fさん

2日間は職場であるホテルの駐車場に寝た。一緒に避難していた友人が同じ職場ではないので、病院の駐車場に移り更に10日間ほど車中泊をした。昼間はお客さんのプレハブの事務所に行き、食事等を済ませて夜は車で寝ていた。自分の車で一人で寝たり、車のない同郷の男の子が自分の車で寝て、自分は友人の車に2人で寝たりした。貯金とお客さんから頂いた餞別を資金にして5月に母国に一時帰国した。6月に帰国して新居を探し始めたけど、なかなか見つからず、お客さんのプレハブの事務所に2ヶ月程住まわせてもらった。9月頃に知人の紹介で現在のアパートに引っ越した。

■ 避難生活での困難 ……

早い段階で自宅に戻ることができても、水道やガスなどライフラインが止まっていたり、食料を入手するのが難しかったり、仕事が休業になったりと、全員が何らかの困難にぶつかっていた。インタビュー調査では、避難生活で ①生活面全般において困ったこと、②子どもに関することで困ったこと、③シングルマザーとして困ったこと、④外国人として困ったことを尋ねた。

1. 避難生活での困難：生活面全般

困難：生活面全般（複数回答）

不安・恐怖	22名	2度の大きな地震での恐怖 継続している地震への恐怖や不安（「子どもと離れている時に地震が起こったら」「自分がいる建物が壊れないか」「自宅に戻って子どもと2人である時に地震が起こったら」等） 生活への不安・不審者などの不安
眠れない	22名	不安や恐怖感・「車中で足が伸ばせなかった」・「避難所で人がうるさかった」
水	15名	トイレ・風呂・飲料水
避難所生活	12名	トイレの汚さ・「うるさくて眠れなかった」・他人と一緒にいるストレス 病気の感染・「怖い」・「寒い」・人見知り・「乳幼児がいるので」
食糧調達	10名	「店が開いていなかった」・「配給される量が少なかった」・子どもの食糧
その他	10名	「体調を崩した」・「車がなくて移動に困った」 「渋滞や給油に時間がかかった」・壊れた物の購入・金銭面

熊本地震では2度にわたる震度7の地震だけではなく、余震が一日に何度も起こる生活が続いた。14日と16日の震度7を越える地震で味わった恐怖に加え、いつ起こるか分からない余震に対する不安の声が多く聞かれた。地震に対する恐怖感や不安感は、避難生活中だけではなく、インタビューを行った時点でも未だ継続している人も少なくなかった。自宅に入るのが怖くて着替えや食料を確保する等、必要最低限の用事ではしか自宅には戻らなかった人、避難所が閉鎖し統合されていく中で避難所を転々とした人、「強い恐怖感を味わった家に入ることができない」との理由で建物自体の被害は少なかったものの、引っ越しを余儀なくされた人などがいた。また、インタビューを行った12月の時点でも自宅にいる時は直ぐに逃げられるように常に玄関を開けた状態にしている人もいた。さらに、2度の大きな地震が夜間に起こったこともあり、自宅に戻った後も夜だけは車中泊をしていた人も多かった。子どもが成人し現在は一人暮らしをしているある人は、夜に一人であるのが怖いので、震災後に夜間の仕事に転職した。

地震への不安だけでなく、子どもの食料の確保の問題や、震災で仕事に行けず収入が途絶えたこと、自宅を失い次の住居探しが困難であること等、今後の生活への不安を話した人も少なくなかった(9名)。女性のための世帯で、車中泊や避難所生活中における、安全面の不安を話した人もいた(2名)。

また、不眠を訴えた人も多かった。寝ている時に地震がこないか不安で眠れない人もいれば、今後の生活に対する不安で眠れない人もいた。「車中泊では足を伸ばして眠れず、避難所に行ったものの、人が多くうるさくて眠ることができず、結局自宅に帰ったものの、今度は自宅が壊れないか不安で眠れずと、どこに行っても眠ることができずにストレスが溜まり、体重が激減した」と答えた人もいた。

更に、熊本地震では電気は直ぐに復旧したが、断水が続いたこともあり、調査協力者の半数が「水」で苦労していた。飲料水に困ったと答えた人も多かったが、トイレや入浴で困った人の方が多かったようだ。避難所ではトイレの水が流せず不衛生だった所も多く、トイレの利用をなるべく我慢した人もいた。ある女性は入浴施設を利用するのに2〜3時間待たされた。風呂に入れずに配給されたウェットティッシュで体を拭き忍び、生理中には、まず濁った水で下半身を洗い、最後に飲み水で洗い流したと話してくれた人もいた。また入浴施設やコインランドリーの利用が経済的な負担になったと話した人もいた。

調査協力者の半数以上が経験した避難所での生活は厳しく、特に小さな子どもを持つ人の中には、感染症等の心配をしたり、実際に「病気を移された」と話した人もいた。「大きな地震が来たら、避難所自体が崩れてしまうかもという恐怖があり、避難所にいたくなかった。でも、自宅には戻れず、車がないため車中泊もできないので我慢をした」という人もいた。

中国出身 Gさん

避難所では皆が話しているのでゆっくりできずに、子どももそれで眠れなかったらしく避難所を嫌がって自宅に戻った。普段は2階で寝ているけど、1ヶ月くらいは1階で寝ていた。とにかく怖くて不安がずっと取れず、どうすれば良いのかが分からなかった。他人のこととか、色んなことを考えている余裕はなく、とにかく不安。1ヶ月ほど子どもの学校も休みだったこともあり中国に帰った。

中国出身 Hさん

避難所のトイレは水も使えずにとっても臭くて悲惨な状況。ペットボトルに入っていたわずかな水で歯を磨いたり顔を洗ったりした。食料の配給にも人が沢山いて、待ったあげくに手にしたのは固くなったおにぎり。店には商品はなく、病院には重症患者のみ受け付けるとの張り紙。高齢の友人の母に頭痛があり、薬局4カ所を回ってやっと痛み止めを購入できた。車も持っていない。睡眠も取れず体もきつかった。天気予報（大雨の予報）などその時の状況を考慮して、この状態で熊本にいることは難しいと思った。

2. 避難生活での困難：子どもに関して

困難：子どもに関して（複数回答）

精神的/行動の変化	10名	「一人で眠れなくなった」・「走り出すようになった」・回避行動 「留守番ができなくなった」・「学校に行きたがらなくなった」 「やる気がなくなった」・「少しの揺れでも極端に怖がる」 「声を出さなかった」・「言うことを聞かなくなった」
特になし	9名	「家族や友人等の助けがあったので」・「子どもは冷静だった」 「子どもが情報収集してくれた」・「子どもが呼び寄せてくれた」
子どもと離れる不安	9名	「仕事に行けない」
避難所にいたがる	5名	「寂しくない」・「友達と楽しんでいた」・「また地震があつてほしいと言う」
子どもの食事	3名	乳児のミルクの確保・食物アレルギー
体調を崩した	3名	「避難所での生活で」
勉強への影響	2名	「高校受験なので」
気を使う	2名	「避難所で」・「お風呂で」
その他		遊ぶ場所の確保・反抗期の娘との関係の悪化・生活リズムの崩れ 子どもが来日したばかりでストレス

調査協力者のうちの23名は子どもと一緒に住んでおり、3名は成人となった子どもが県内及び九州内に住んでいた。震災時や避難生活で子どもに関する困難について尋ねたところ、「特になかった」と答えた人は比較的多かったが（9名）、その人たちの子どもは中学生以上に達しているか（5名）、小学生以下の子どもがいても高校生以上の姉弟がいた（4名）。7名は、「上の子が下の子の面倒を見てくれた」と話す等、子どもがある程度の年齢に達するとサポート役になっていた。また、子どもが間接的な情報源となっている例も見られた。子どもが学校の避難訓練や防災教育で学んだ知識

や、学校の保護者から入手した情報が役立ったという協力者も複数いた。また、発災時や辛い避難生活も「子どもがいるから頑張れる」との声も多く聞かれた。

これに対して、子どもの年齢が低いほど困難は大きかったようだ。14名が子どもに関することで困ったことがあったと答えたが、その全員が小学生以下の子どもと生活をしていて、10名が「数日間はショック状態で呆然として声を出さなかった」等、子どもへの精神的影響や行動の変化を挙げた。また、9名は、余震が続いていたので子どもと離れて仕事に行くことに不安を感じていた。そのうち4名は親や姉妹が預かってくれたり、職場に連れて行くことが許されたりして助かったと話していた。しかし、そのようなサポートが得られない人は仕事を休まざるを得なかった。地震後しばらくたったインタビュー時にも、子どもと離れることの不安が継続していると話す人もいた。

インタビューを行った人の半数(15名)が普段は母ひとり子ひとりの生活をしており、そのうち4名は未就学児との2人での生活であった。この4名は共通して、子ども達が避難生活を楽しんでいたと話していた。避難生活(3名が避難所、1名が姉妹家族との車中泊)ではいつもの母子2人での生活とは違い、同年代の子どもや遊び相手をしてくれる人が多かった。また食事等もみんなで一緒に取ったり、普段とは違う食事や遊び道具があったりと、子どもは楽しんでいる様子だった。「避難生活を終えて自宅に帰り、母子2人だけの生活に戻ると、子どもが寂しがって避難所に戻りたかった」と話した人もいた。

一方、中高生の子どもを持つ親、とりわけ受験生を持つ親は、学校が休校になり、勉強への影響がないか心配していた。「中学生になる子どもが来日したばかりで、日本語も日本の生活にもまだ慣れておらず、避難所にいることがとてもストレスになっていた」と話した人や、「震災で自分の精神状態が不安定になったこともあり、思春期の娘と喧嘩が続き、娘が一時的に家出をした」という人もいた。

インドネシア出身 Bさん

地震後は子ども達だけにして仕事に行くのがとても不安だった。家族が他にいたら預けてるのにと考えた。前震、本震とたまたま仕事を休んでいて本当にラッキーだった。離れていたらもっとパニックになっていたと思う。子どもがいるから強くなれる。子どもも守ってくれるし、心の支えになる。

中国出身Iさん

避難所でもらったソーセージが美味しかったらしく、子どもがもう一度地震があってほしいと言っている。いつもの2人だけの生活とは違い、避難所では保育園の友達もいるので寂しくなかったこともあると思う。子どもにどの様に地震について説明した方が良いのかが分からない。最近子どもが保育園で日本語を学んできて、Iさんが日本語ができない事を馬鹿にしている感じもする。地震で保育園が1週間休みになり、子どもとずっと一緒に疲れが溜まって生活のリズムも崩れ限界を感じた。

3. 避難生活での困難：シングルマザーとして

困難：シングルマザーとして（複数回答）

怖い・寂しい・不安	8名	男性がいない不安感・地震の時の寂しさ・一人・安全面に対する不安・将来への不安・病気の時の心細さ
金銭面	3名	「経済的に苦しくなった」
育児と仕事の両立・時間	4名	「子どもと過ごす時間がない」・「一人にできない」
その他	各2名	「言葉や文化が分からない」・娘に対する性被害の心配 片づけ・力仕事・車がない
特になし	15名	子ども・家族・友人・仲間・支援等の助けがある 「夫がいなくても同じ」

シングルマザーとしての困難については、「寂しさ」や「不安感」を挙げる人が多く「男性がいるのといないのとでは安心感が違う」と話した人もいた。それらは平常時にも感じてはいるものの、震災時には一層強く感じたとも話していた。2名は子どもが病気をした時には、特に自分も不安になったので、夫の存在が欲しかったと話していた。6名は震災で他に頼る人もおらず、別れた夫や子どもの父親に連絡を取ったと話していた。ある人は「子どもを産んだばかりなので寂しくてとても辛かった」と話し始めてくれたが、涙で話すことができなくなり、インタビューをしばらく中断した。

その他、自分の収入だけでは経済的に苦しいなど金銭的な問題や、一人で育児をしながら仕事をする事の難しさも挙げられた。一つの仕事だけでは生活が苦しく、夜や週末も仕事をしているから子どもとの時間が取れないことや、子どもを一人置いて仕事をする事の不安感を話した人もいた。その一方で、家族や友人、近所等周りからのサポートがあるので特に問題はなかったと話した人も多く、「夫がいても助けに

はならない」との声も聞かれた。また、夫を日本語や日本文化の情報源やコミュニケーションの媒介としている人（「夫がいない＝日本語が読めない」等）、「夫がいない＝車がない」と話す人もいた。

中国出身Iさん

地震の時は本当に寂しかった。1回目の地震の時に電話してくれ、2回目の地震で迎えに来てくれた友人の存在は本当にありがたかったし、一生忘れない。シングルマザーで本当に寂しかった。（涙を浮かべながら。）元夫から怖いかと聞かれた。当たり前なのになぜ聞くのかが理解できなかった。

フィリピン出身Eさん

職場が遠いので地震や事故で自分の身に何かが起こったら娘はどうなるのだろうと心配したし、今も考える。ここには他に家族はいない。元夫はいるけど、高齢なので娘を育てることは無理だと思う。フィリピンには家族がいて、何かあっても安心することができるので、フィリピンに帰ることも考えている。

4. 避難生活での困難：外国人として

困難：外国人として（複数回答）

特になし	22名	「良くしてくれた」・「助けてくれた」・「皆が親切にしてくれた」
言葉	5名	「早く話され理解ができなかった」・「書いてあるものが理解できなかった」 「避難指示が理解できなかった」
居心地が良くない	3名	「日本人ばかりの避難所だった」 「子どもが日本に来たばかりで慣れていない」
その他	各1名	差別や偏見・家族の不在・「助けを求められなかった」

「外国人として困ったことはありましたか？」という質問に対して、22名は困ったことがあっても周りにいた人が助けてくれた等の理由で、「特に無し」と答えた。

「日本では支援がある」、「物資が公平に分配される」、「日本人は優しい」、「日本は素晴らしい」との声があった。しかし、外国人として困った経験をした人も少なくはなく、5名は「温泉に行きたくても漢字が分からずどこが温泉か分からなかった」など、言葉の問題を挙げた。また、日本人ばかりの避難所で居心地悪く感じたり、「あいつ、外

国人だ」と言われたり、「話してもらえなかった」、「お知らせを伝えてくれなかった」等、偏見や差別を感じたという人もいた。「家族がいない寂しさ」や「故郷が恋しくなった」ことを話した人もいた。

また、外国人として困ったことはなかったと答えた人の中にも、「フィリピン人達は言葉も分からないし、子どもも遅くまで起きていてうるさかったので、日本人からクレームがきていた」、「地域の日本人の間で、フィリピン人はシングルマザーばかりと言われていて、避難所でも高齢の女性が『お父さんはどこ？』『なんで一緒にいない？』とか子どもに言ってきた」などと話す人がいて、話の節々に外国人であるゆえの困難な体験が見え隠れしていた。また、「自分は日本語ができるので困らなかったが、日本語ができない人は大変だったと思う」という人や、在留歴が短い同郷の知人が言葉で困っていたので通訳などの世話をしたという人もいた。また「フィリピン人は避難所を知らない」や「中国人は地震の時にどうすれば良いか分からない」など一般的な自国民のこととして話をした人もいた。

中国出身 Jさん

日本人は地震が身近だから、何をすればいいのかが分かっている。中国はあまり地震がないから、何の準備をすればいいのか、どこに避難するのかとか防災や避難についてよく分からない。地震関連の情報は中国語ではほとんどないので、日本語が分からなかったら大変だと思う。日本語が分かるので情報がなくて困ったことはなかった。当時の状況や予想、何をすればいいのかなどの情報は欲しかった。

フィリピン出身 Kさん

公園や役所に避難していた時、日本人がみんな静かなので、助けてと言いくかった。みんな困っているのでも自分のわがままは言えなかった。不安だった。日本人はこんなときでも笑っていたりして驚いた。また、場所取りしている人や平気で化粧直しをしている人など聞いて驚いた。周りへの配慮が足りない人も結構いた。

■ 情報

インタビューでは、「地震に関する情報をどのように入手しましたか」と質問した。多くは、友人や家族、職場や近所の知人等と、平常時から繋がりを持つ人からの情報に頼っているようであった(24名)。出身国が同じ友人とSNSやメールを使って情報交換をしたり、日本人夫を持つ友人や日本語のできる友人に情報をもらったりした人が多かった。子どもが情報収集を積極的行ったり、学校で学んできたことを教え

でもらったりした人もいた。

情報入手のツールとしては、SNSを利用した人が多く、中国系の方はWeChatを、フィリピン人はフェイスブックを主に利用していた。また、「避難所でテレビが常に流れていた」、「テレビを24時間つけていた」など、テレビで情報を入手していた人も多かった。ラジオを利用したのは5名のみだった。自治体や国際交流協会や、町内放送など、公的機関から情報を入手した人は5名いた。

調査協力者の半数は母国語での情報は全く入手できなかったと答えた。また、母国語や英語で情報を入手できても、その情報量は極めて限られていた。2名は、日本語でさえ地震や被災者支援に関する情報は入ってこなかったと話した。5名は震災関連の情報が日本語のみだったので困ったと話した。知りたかった情報として、「いつ次の地震が来るのか」、「いつ余震が止むのか」等、余震に関すること（6名）や、「震災時にどうすれば良いのか」（3名）、「避難所がどこにあるか」（3名）、「給水情報」（2名）、「支援内容」（2名）、「食料配給情報」（1名）が挙げられた。

情報源（情報媒体）	（複数回答）	情報源（友人・知人）	（複数回答）	母国語情報の有無	（複数回答）
SNS	21名	友人	17名	なし	15名
フェイスブック	16名	同国出身	9名	SNS	3名
LINE	7名	日本人	4名	友人・知人	2名
WeChat	4名	職場	7名	ニュース	1名
Instagram	1名	支援者	5名	新聞	1名
不明	2名	子ども	4名	メール	1名
テレビ	18名	家族	4名		
ラジオ	5名	近所の人	4名		
避難所	7名	夫（元夫）	3名		
その他		ネットコミュニティ	3名		
町内放送・ネット・回覧板・新聞		同じ学校の保護者	2名		
携帯の緊急アラーム・メール・KIF					

・・・フィリピン出身しさん

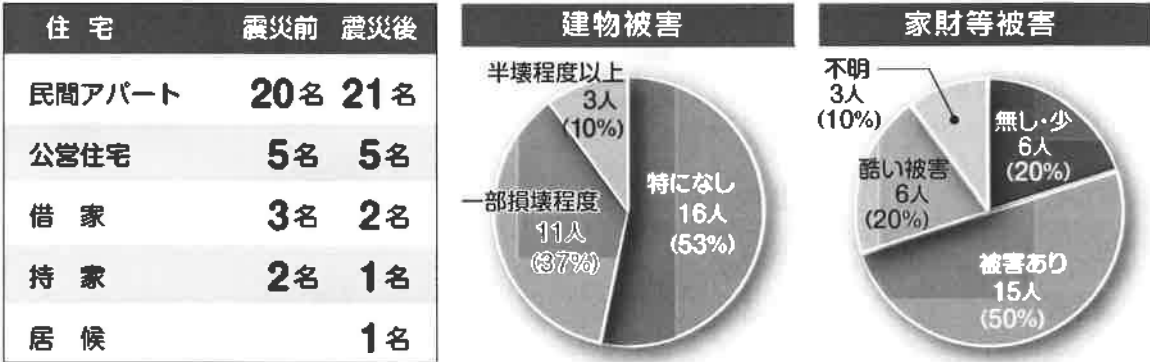
地震についての情報や支援の情報はどこからも入ってこなかった。フィリピン人の友達とフェイスブックやメールで情報交換はあったけど、日本語が読めないし、テレビが壊れたので他は情報源がなかった。未だに震災関連の支援情報とかも知らない。県南から熊本市に帰ってくる時も熊本の状況もよく知らずに帰ってきた。

フィリピン出身 Mさん

携帯の警報や、友人や友人の夫、コムスタカから教えてもらった。テレビやラジオ、Yahoo防災速報を見ていた。町内放送で物資配布等のお知らせがあった。LINEではフィリピン人会のグループに入っている。フェイスブックでは友人等がタガログ語で情報をあげていた。何が起こったのか、何が起こるのか、どこに逃げて、どう自分を守るのかを知りたかった。

■ 住 宅

熊本地震の前には、2名以外は民間アパートや公営住宅等の賃貸住宅に住んでいた。自宅の建物に被害のあった人は半数程（47%）だが、21名（78%）が家財などに何らかの被害があった。震災後に7名が引っ越しをしており、北区から中央区へ引っ越した2名以外は同じ地区内での引越だった。自宅建物が半壊以上の被害を受けた3名は、継続して住むことができずに引越しを余儀なくされた。1名は自宅は一部損壊だったものの、自宅横の崖がいつ崩れてくるかが分からず、やむを得ず引越した。また1名は自宅建物への被害は少なかったものの、極度の恐怖を感じた自宅に住み続けることが精神的に辛いとの理由で引越した。



り災証明書の申請を行ったのは僅か4名のみで、判定結果は「大規模半壊」と「半壊」が各1名ずつ、「一部損壊」が2名であった。「大規模半壊」と「半壊」の判定だった人は、インタビュー時点で「みなし仮設制度」で民間アパートに入居をしていた。被害の酷かった地区に住んでいた人の自宅も、家が傾く等で住めなくなっていたが、り災証明や他の支援制度について良く知らなかったため何も申請をしておらず、新しいアパートへの引越費用もすべて自己負担していた。

…フィリピン出身Lさん

地震による建物への被害はそんなに大きくなく、被災証明のことも知らないので申請はしていない。他の住人は継続して今も住んでいるけど、Lさんは大きな建物に住むことが怖くて眠れなくなったので8月の初めに今の2階建てのアパートに引っ越した。前のアパートを借りる時に、自分の名義で借りようとしたが、フィリピン人は借りれないと言われて、同郷の友人の旦那さんが借りてくれた。今のアパートを借りる時もどうせ同じと思い、初めから友人の旦那さんの名義で借りた。震災後のアパートの手続きとかも友人の旦那さんがしてくれた。

…フィリピン出身Fさん

スナックのママが一軒家を借りていて、家賃をママに払って、そこに従業員として友人と2人で住んでいた。友人の部屋はまだ被害は少なかったけど、Fさんの部屋の被害は酷かった。もともと古い家なので大家さんは修理をしないと言った。離婚後に住む場所がなく、大家さんに家賃を2万にしてもらって住んでいたアパートだったので、支援制度は使わなくてもいいと思う。

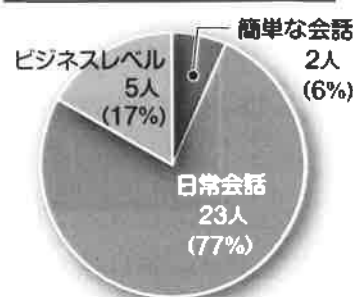
震災における外国人シングルマザーと情報

日本で生まれ育った人とそうでない人では、過去の経験や学習を通じて身に付けている情報に違いがある。日本で生まれ育ち教育を受けていると、実際の地震や学校等で避難訓練を経験する。また、災害時には学校の体育館等が避難所になり、食料や水、毛布などが支給されることも知っているであろう。しかし、地震がほとんどない国も多く存在し、地震や防災教育を受けたことのない外国人シングルマザーは少なくない。熊本地震の前に水や懐中電灯等、「震災に対して何らかの備えをしていた」、「防災訓練を受けた」と話したのは7名のみで、8名は「地震や防災については何の知識もなく、備えもしていなかった」と答えた。地震や防災に関する限られた知識の中で、「突然の地震災害に見舞われてどう対処すれば良いのか分からなかった」という人は少なくなかった。

また、その人の持つ日本語能力や人間関係によって新しく入ってくる情報にも違いがある。インタビューに協力してくれた女性達は1名(2016年4月時点で4年4ヶ月)を除いては5年以上の在留歴があり、日本語能力を聞いたところ、28名(94%)は日常会話

には問題はないと答え、ビジネスレベルの会話力を持ち合わせている人も5名いた。しかし、インタビュー中に日本語での質問や説明が理解できなかったり、協力者の日本語が理解できないことも多々あった。また、日本語の読み書きになると困難を感じる人が多かった。7名以外は、普段の生活で子どもの学校や役所等からの書類を理解することが難しく、家族や友人等に頼んで読んでもらうか、読まずに手つかずにしていた。日本語能力(特に読解力)に乏しい人が、行政等が発行する日本語の震災情報を受けて理解していたとは考えにくい。公的機関から情報を入手したと答えた人は5名のみで、そのうち2名は避難先や物資の配布を町内放送で知ったというものであった。また、KIF(英語・中国語・韓国語)やコムスタカ(タガログ語・中国語・インドネシア語を含む9ヵ国語)はホームページやフェイスブックで多言語での情報発信を行っていたが、これらにアクセスしたことがあるのは1名のみで、自動翻訳機機能がある熊本市や熊本県のホームページにアクセスした人はいなかった。地震に関する情報については26名が家族や友人、同僚などと日常的に繋がりを持つ人から取得していた。日本語能力に乏しい多くの外国人シングルマザーにとって情報取得のためにも人との繋がり重要だと感じた。

日本語能力：会話力



日本語能力：読む力

自分の名前だけは読める	1名	3.3%
漢字は理解できる	1名	3.3%
平仮名のみ読める	2名	6.7%
平仮名・カタカナは読める	8名	26.7%
平仮名・カタカナ・多少の漢字が読める	11名	36.7%
大体できる・中級レベル	5名	16.7%
ビジネスレベル	2名	6.7%

震災時やその後の避難生活で言葉の問題で困ったと答えたのは5名のみで、それ以外は日本語が分からなくても友人や周りの人が助けてくれた等の理由で困らなかったと話した。しかし、震災関連情報は外国人シングルマザー達に届いていなかったと強く感じざるを得なかった。「り災証明書の申請をしましたか？」との問いに対しての答えの多くは、「それはなんですか？」であった。り災証明書の申請を行ったのは僅か4名のみで、「支援制度のことを良く知らないけど恥ずかしくて人に聞けなかった」、「半

り災証明書

申請済	4名
申請無	24名
知らない	12名
よく知らない	5名

壊”や“全壊”の言葉は聞いたことがあるけど、何かは知らない。」と話した人もいれば、り災証明書や被災者支援については「全く聞いたこともない」と答えた人が予想以上に多かった。家族や友人などから、ある程度の情報を得たことで、調査対象者の多くが「言葉では困らなかつ

た」と言っている。その一方で、熊本に住む日本人には広く知られている「り災証明書」を含む被災者支援情報の存在や内容は、外国人の間には伝わっていないと感じ、多言語情報発信の課題も鮮明に見えてきた。

震災における外国人シングルマザーと仕事

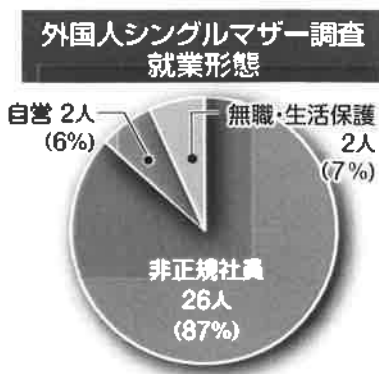
インタビューを行った70%に当たる21名は、母子のみで生活をしており、その内15名は、国内には家族や親せきがない。震災時も友人や職場など来日してから今日までに自分自身で築いた人間関係の繋がりを頼りに生活をしていた。しかし、そのような繋がりがあっても、経済面や子どもを預けるといったサポートを得ることは難しかったようだ。大きな地震を2度経験した後も揺れは止まらず、いつ次に大きな地震が来るか分からないという状況の中で、子どもと離れることの不安感は、家族のサポート

職 種	本職として	副職として
英語講師	2名	1名
販売・店員	3名	1名
介護・保育	2名	
ホステス	10名	4名
食品加工	4名	1名
製造業	2名	
清 掃	2名	1名
検査員	1名	
事 務	1名	
農 家	2名	
無 職	2名	
飲食店		2名
通 訳		2名

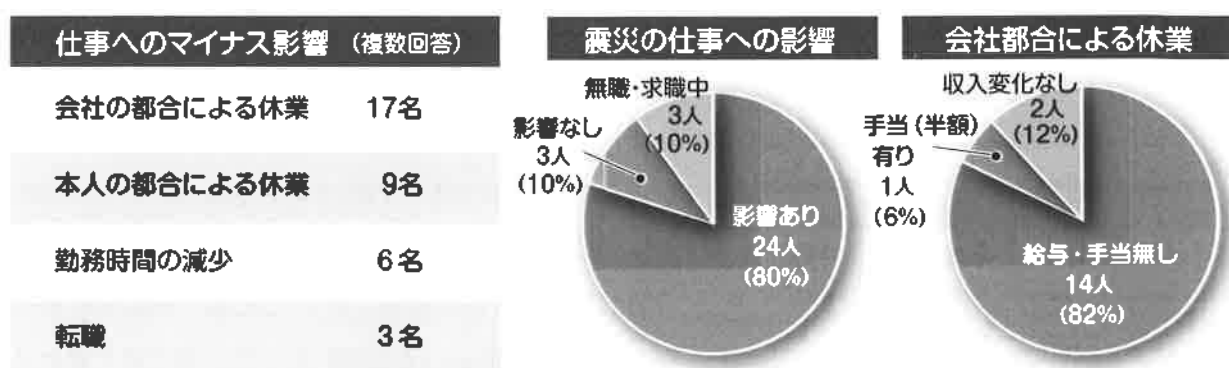
がないシングルマザーの間で特に強かった。子どもが小さくても、子どもを預けることのできる家族や親せき（中には別れた夫の両親）がいた人は、そんな家族の存在が本当に助かったと話していた。子どもと離れることや長引く余震に対する不安は、外国人シングルマザーの経済活動にも大きく影響した。

熊本県が行ったひとり親家庭における熊本地震後の現況確認調査結果では、被災前の就業形態として、児童扶養手当受給者の回答者の43.5%が正社員で、38.4%は非正規社員であった。それに比べて、本調査協力者には、正社員は一人も含まれておらず、2名の自営業者と2名の生活保護受給者を除いた

87%の人が、パートや派遣などの非正規雇用であった。子どもを養育する女性が仕事と子育ての両立をすることは難しく、特に子どもが小さい場合には、働く時間や形態に制限がかかる。それに加えて、日本語能力の乏しさや社会の偏見などが弊害となり、外国人シングルマザー達は、自由な職業選択ができずに、不安定な職に就く傾向にあると考えられる。



外国人シングルマザーは、賃金が低いために、一つの就労からの賃金だけでは、生活することが難しいのが現状だ。調査を行ったうちの11名は、仕事を掛け持ちしており、これは仕事をしている人の約39%となる。月収について公表してくれた28名のうち13名の給与収入は、月に15万円に満たず、ほとんどの人が10万円前後である。中には週40時間(及び残業)の本職に加え、週末及び祝日には、1日5時間半のアルバイトをしているけれども、月の給与収入は15万程で、いつもギリギリの生活を送っていると話す人もいた。15万円以上の給与収入がある15名のうち3名以外は、本業または副職としてホステスの仕事をしていた。厚生労働省の発表によるとひとり親世帯に貧困率は50.8% (2016年)としているが、外国人のひとり親世帯と限定すると、貧困率はさらに高いと予想される。



熊本地震は、平常時でも決して楽とは言えない生活を送っている外国人シングルマザー達の仕事にも、大きな影響を及ぼし、生活をより一層厳しいものにした。調査協力者の80%が、仕事に何からの影響が出たと答えている。会社の都合により休業になった17名のうち、1名は給与の半額が手当として支給され、1名は有給消化、1名は給与が通常通り支払われた。しかし、14名(82%)は、その間の給与の支払いや手当の支払等が一切なく無給となった。また会社再開後も、9名は続く余震の中で「子どもと離れることができない」、「被災した家を片づけねばならない」等の理由により仕事を休んでいた。そのうち有給を利用できたのは1名のみで、他はその間無収入であった。また震災による熊本全体の観光や飲食関係の消費の低迷が影響してか、ホテルやスナックなどのサービス業に就労している6名は、売り上げの減少により、労働時間が減らされて収入が減少した。休業や労働時間の減少が原因で転職をしたり、元の仕事を継続しながら、他の仕事をしていた人もいた。11名は収入が減り生活が苦しくなったと話し、収入がなくなり借金をせざるを得なかった人や今後の生活への不安を持つ人もいた。生活が苦しい中、追い打ちをかけるように震災が起こり休業せざるを得なくなり、しかし非正規雇用のために、補償が十分ではなく無給となり、さらに生活が苦しくなる等と、熊本地震は多くの外国人シングルマザーにとって生活を大きく揺るがすものであった。

それぞれのストーリー

(名前は仮名を使っています)

■ ローサさんのストーリー

ローサさんは、日本人男性と離婚し、赤ちゃんを含む子ども3人とともに新しい生活をスタートしたばかりの時に、熊本地震に遭いました。

4月14日前震

14日の大きな揺れがローサさん家族を襲ったのは、同じアパートに住む友人夫妻と食事をしていた時でした。初め何が起こったか分からず、「お化けが出たのかと思った」。友人の夫が地震だと言い、ローサさんは子ども2人を抱え、外に避難しました。住んでいたアパートがバラバラと崩れていくのを目の当たりにし、「パニック、パニック、パニックだった。」習い事に行っていた子どもを、友人と一緒に迎えにいき、その後は駐車場に停めた友人の車の中に避難していました。

翌日、友人家族と一緒に福岡のホテルに避難したものの、依然パニック状態でした。30錠ほどの精神安定剤とお酒を、記憶がなくなるほど飲みました。せっかく新しい生活を始めたばかりだったのに、地震でまた家を失い、これからどこに住むのか不安でした。離婚、震災とあまりにも問題が続くため、もうどうでもいいという気持ちになり、死にたいとさえ思いました。

居心地の悪い避難生活

16日の本震後、ローサさんは福岡から熊本に戻りました。その晩は、知人宅の敷地でテント泊をしました。しかし、雨が降り、寒く怖いので、翌日に友人に連れられて小学校の避難所に行きました。そこは、避難者で溢れていて、玄関の靴箱の横にしかスペースを確保することができませんでした。寒いうえ、直ぐ近くに犬や猫もいて、小さい子を抱えるローサさんには、過酷な環境でした。

また周りの人が話しかけてくれなかったり、「あいつ、外人だ」という雰囲気を感じるなど、とても居心地が悪い思いをしました。支給された食料も少なく、赤ちゃんのミルクもビニールで少ししか貰えませんでした。子どもにご飯を食べさせたいと思っても、お湯を確保するのさえ困難でした。あまりにも辛かったので、ローサさんはコムスタカに連絡をし、熊本市の国際交流会館に避難することになりました。

国際交流会館の避難所は、初めの避難所とは違い、食料も物資も豊富で、人も優しく、言葉にも困りませんでした。色んな国の人が避難していたこともあり、ローサさんの不安は少し解消されました。避難者と仲良くなり、家の片づけを手伝ってくれることもありました。

しかし、子どもは地震をととても怖がって、余震のたびにパニック状態になりました。
また、体に湿疹ができたり、家族全員が風邪を引いたりしました。避難所では、子どもたちが騒ぐので気を遣いました。また、お風呂や洗濯をしに行くのも大変で、出費がかさみました。

今後への不安

ローサさんは、今後どこに住むのか、何をして生活していくのか等を考え出すと、不安で仕方がありません。不安感からか、地震後はお酒の量が増え、そのことで反抗期の子どもとの関係が悪くなりました。また赤ちゃんを含む3人の子どもをローサさんひとりで抱え、心細く辛い日々を送っています。今回のインタビューで「シングルマザーとして大変だったことは？」との質問に対して、ローサさんは涙ぐんで話ができませんでした。

■ メアリさんのストーリー

メアリさんは、日本人男性と結婚して子どもが産まれましたが、その後離婚。現在は、工場で週5～6日働きながら、ひとりで子どもを育てています。子どもがまだ小さく、病気がちなため、仕事を休まなくてはならない場合があります。また、離婚した元夫からの養育費の支払いも滞っています。そのため、経済的には楽ではありません。しかし、自宅のすぐ近くに、来日した実の姉妹が住んでおり、助け合いながら暮らしています。

4月14日前震

4月14日夜の前震のときは、メアリさんは自宅で、子どもと一緒に居間でテレビを観ていました。初めて経験する揺れで、棚が落ちてきそうになりました。片手で子どもを抱え、片手で棚を抑えながら、台所のテーブルの下に隠れました。教会の友人に電話したところ、外に出た方が良いと言われたので、急いで着替えて外に出て、近くに住む妹夫婦の家に行きました。子どもは、びっくりした様子で、恐怖のためか、その後しばらくは話をするのができませんでした。

4月16日本震

4月16日未明の本震のときは、メアリさんは妹の家で子どもと寝ていました。強い揺れでしたが、妹の夫が「このまま！」と言ったので、子どもの上に覆いかぶさって布団をかぶりました。前震以上の激しい揺れで、家中の物が落ちてきました。本当に怖くてパニックになりましたが、子どもを安心させるためしっかりと抱きしめながら「大丈夫よ、神様にお祈りしていたら、守ってくれるよ」と話しかけ続けました。しかし、子どもは一言も話すことができませんでした。揺れが落ち着いてから、皆で外

に出て、車の中で過ごしました。

2 週間の車中泊

避難所には1晩だけ泊まったのですが、人が多すぎたので、その後は、妹家族と一緒に、自宅前の駐車場か、スーパーや職場の駐車場に車を停めて、車中泊をして過ごしました。メアリさんの住む地域では、ライフラインへの影響はなく、また幸いにも家への被害は少なかったのですが、家の中には怖くて入ることができませんでした。食事は急いで作って車の中で食べていました。シャワーも1日おきに手早く済ませていました。そういう生活が2週間続きました。メアリさんは子どもと2人になるのが怖くて自宅に帰りたくなかったけど、2週間後に姉たちが自宅に戻り、近所の人の多くも戻っていたので帰ることにしました。しかし、2日間はやはり怖くて夜は自宅の駐車場で車中泊をしました。

仕事と子育ての両立

職場も地震の被害は少なく、すぐに再開していましたが、メアリさんは子どもと離れることができませんでした。しかし、仕事を休めば、その分給与も安くなるので、地震から1週間後、職場に復帰しました。仕事を再開後も余震は続き、その都度一人で動揺しました。周囲の人からは「慣れるよ」と言われましたが、慣れることなど全くできず、とにかく子どものことが心配でなりませんでした。

子どもは病気がちなうえ、地震後しばらく、しゃべることができませんでした。保育園も再開していましたが、そんな子どもが心配で、仕事に復帰した後も保育園には預けず、妹に子どもの面倒を見てもらいました。最近、子どもは自宅にいたがらず、姉妹の家に行きたがります。メアリさんと2人だけの生活を寂しがっているようです。フィリピンにも、もう5年ほど帰っていません。早くフィリピンの両親に子どもを会わせたくてなりません。



■ マリアさんのストーリー

マリアさんは、日本人の夫と、2人の子どもと住んでいますが、夫とは家庭内別居状態です。離婚も考えましたが、子どもの将来のことが心配で、決心がつかない状態です。

4月14日前震・16日本震

前震・本震の時、夫はたまたま入院中で不在でした。前震の時は、自宅への被害は少なかったのですが、本震の時は、前震以上に揺れが激しく、色んな物が落ちてきて、外に出ることもできませんでした。揺れが落ち着いて、壊れたドアを何度か押して着の身着のまま外に出て、近くの公園に避難しました。公園の前のマンションがゆっく

り傾いていくのを目の当たりにし、とても怖い思いをしました。マンションにはまだ人が残っていて、窓を割って外に出てくる人もいました。夜が明けてから、近くの中学校に避難しました。

3ヶ月の避難生活

中学校の体育館で2か月ほど避難生活を送りました。その後、区役所の避難所に1か月ほどいました。中学校では、夜眠れず、グラウンドに停めた車の中で寝ていました。

マリアさんが避難所で一番困ったのは水でした。地震後しばらくは、自宅でも避難所でも水は出ず、道が壊れていたため、給水車も来ることはできませんでした。別の避難所まで水をもらいに行っていました。入浴は、隣の市まで行き、3時間待って2,000円払って家族湯に入ることもありました。

言葉の問題

被災者のための様々な支援があることを知ったのは、夫が退院して避難所で合流してからのことでした。被災者は入浴施設で無料で入浴できることも後から分かりました。そもそも、漢字が読めないため、どこで入浴ができるのかも分かりませんでした。避難所の中の表示も、最初は漢字ばかりだったので、どこに何があるのか分かりませんでした。その後、校長先生がカタカナで読み仮名をつけて下さったので、助かりました。

同じ避難所に、同じ国出身のシングルマザーの家族が3組ほどいました。子どもが夜遅くまで起きてうるさい等、周囲の日本人から何かとクレームを受けていました。彼女たちは言葉も不自由だったので、会話には不自由しないマリアさんが通訳したり、情報を教えたりしました。

避難所では、様々な物をもらうことができました。外国人シングルマザーの中には、避難所で周囲から何か言われることが嫌で、避難所には行っていない人もいました。マリアさんは、同じ国の人の集まりに、避難所からもらった物を持って行って、そういう女性たちに分けてあげることもありました。

会話には苦勞しなくても、漢字は読めないマリアさんは、情報収集に苦勞しました。母国語での情報を得ることはできませんでした。テレビやラジオで言っていることはよく分からず、「コムスタカ」など外国人支援のボランティアや、子どもの友達の母親から様々な情報を教えてもらいました。また、同じ国の友人が流すフェイスブックから情報を得ることもありました。

マリアさんに限らず、多くの外国人は漢字の読み書きが困難です。母国語が無理でも、せめて平仮名やカタカナで情報を流してほしい、とマリアさんは思いました。食料や水、コインランドリーなど、どこに何があるのか、何が無料で、どんな支援があ

るのかなどの大事な情報を知る術が、マリアさんたちには本当に限られていました。

また、生活再建の支援に関することや、半壊の家のこと、お金のことなどを知りたくても、マリアさんの夫や義理母には「あんたは関係ない」と言われ、何も教えてくれませんでした。

子どものこと

地震後、子どもが学校に行きたがらず、やる気がなくなっていることも、マリアさんの心配ごとのひとつです。避難所での炊き出しの食事は、いつもの食事と違うためか、あまり食べてくれませんでした。また避難所では遊ぶ場所が限られていたためか、周囲の影響で携帯やスマートフォンで遊ぶことに嵌っていることにも困っています。

■ ローラさんのストーリー.....

ローラさんは、日本人男性と結婚して出産後、離婚。今は、ホステスとして働きながら、子どもと2人で暮らしています。職場のスタッフが協力的で、何かあれば助けてもらっています。相談ができる同じ国出身の友人もいます。

前震時、子どもは保育園に

前震の時は、ローラさんは工作中でした。職場はビルの7階で揺れが酷く、店内は減茶苦茶になりました。逃げ出すこともできず、本気で死ぬのではと思いました。それでも、子どもだけは助かってほしいと思いました。

揺れが収まってから、直ぐに職場近くの保育園に子どもを迎えに行って、近くの公園に職場のスタッフと避難しました。保育園の子どもたちは皆泣いて、かわいそうでした。職場があるビルはガス漏れを起こしていて、一時立ち入り禁止となり、夜の公園で待っているほかありませんでした。その後、職場の同僚が近くの小学校が避難所になっているとネットで調べ、同僚らと小学校に歩いて行きました。

本震は、小学校の体育館で避難中に遭いました。体育館には300人程いましたが、子どもを抱いて外に逃げました。

1ヶ月月間の避難生活

ローラさんは、小学校の体育館で1ヶ月間避難生活を送りました。初めの2日間は、食料配給はおむすびだけでした。また、水が流れず、トイレが大変でした。初めの1週間は家に帰らず、着替えなどは友人に借りていました。避難所ではよく眠れず、ストレスがたまりました。

5月中旬、避難所が閉鎖になったので自宅に戻りましたが、自宅にいるのが怖く、故郷の国に2週間ほど帰りました。同じ国出身の同僚も、皆いったん帰国しました。

故郷から戻ってきても、まだ余震が続いていて、眠れない日々でした。でも、いつ

まで怖がっていても何もできないと思い、強くなろうと決意しました。

一方、子どもは避難所で色んな人が遊んでくれたためか、避難所生活を楽しんでいて、自宅に帰っても避難所に戻りたがるほどでした。幸いなことに、よく寝てよく食べて、精神的に不安定になることもなく、元気に過ごしてくれました。ローラさんは、子どもは普段ローラさんと2人だけの生活だったので、寂しかったんだなと思っています。

今後の仕事のこと

ローラさんの職場は、震災後、1ヶ月ほど休業していました。休業している間は、給与の半分为支払われました。また、職場からお見舞い金も受け取りました。しかし、収入が減った分、生活は苦しくなり、お金を借りたこともありました。

職場は再開しましたが、地震後、仕事が暇になったことがローラさんの心配の種です。職場のビルは現在も工事のためのネットが張ってあります。隣のビルは斜めになっている気がします。今の職場にいるのは少し怖いというのが、ローラさんの率直な気持ちです。それでも、ローラさんは職場のみんなが家族のように支えてくれることに心から感謝しています。お金には困っているけれど、それはみんな一緒、と思っているローラさんです。

■ サラさんのストーリー

サラさんは、日本人男性と離婚後、子どもと2人で暮らしています。仕事は、ホステスとしてパート勤務しています。

4月14日前震発生時

4月14日夜、サラさんは自宅で子どもと一緒に風呂に入ろうとしていた時に、大きな揺れに襲われました。繰り返し揺れが続く状態の中、パニックに陥ったサラさんは、子どもを引きずるようにして外に出て、階段を駆け降り、駐車場めがけて走りまわりました。駐車場で我に返り、子どもの姿を見ると、子どもは裸で足を擦りむき、血を流して震えながら泣いていました。そんな子どもの姿に気づかなかったことに、サラさんは「ごめんね、ごめんね」と何度も謝りました。

近くの小学校へ避難したサラさんのもとに、離婚後も交流があった元夫の母親から電話がかかってきました。そして義父母宅に避難させてもらうことになりました。

4月16日日本震と避難生活

16日未明、再び大きな揺れに見舞われ、サラさんは義母・子どもとともに、近所の公園に避難しました。そして、家に帰ることに不安を感じ、避難所に行きたいと義母に訴えました。しかし、酒に酔っていた義母から「この家を弱いと思っているの?」と

言われ、子どもも「お母さんとおばあちゃんどっちを選ぶの?」と言われました。サラさんは義母と喧嘩したくありませんでしたが、子どものことを第一に考え、2人だけで義母宅の近くの避難所へ避難することにしました。家を出るとき、義母が義父に「サラさんはもうこんな家居たくないんだって」と言うのが聞こえ、思わず泣いてしまいました。その後義母は電話で謝って、避難所に迎えに来てくれました。それでも、その後は、前に住んでいたアパートの近くの小学校に避難することにしました。

避難所で子どもが被害に

小学校には10日間ほど避難していました。そこで、子ども(女兒)が仲良くなった同年代の男児に足を触られる被害に遭いました。避難所のボランティアに相談し、男児の母親にも対処してもらうことになりました。しかし、サラさんは、ホステスの仕事を再開していたため、被害後も、夜、子どもを避難所に1人にせざるを得ず、とても不安でした。震災後1ヶ月は子どもを一人にできなかったのも仕事に行きませんでした。小学校の避難所では以前から顔見知りであった夜の仕事をしている日本人シングルマザー達と仲良くなり、休みの日にお互いの子どもを見て仕事に行きました。子どもは震災から数日はショック状態で、ボーっとしたり、寂しいと言ったりしていました。今でも、地震に関連することは、見たら当時を思い出すから見たくないと言っています。

住宅の問題

アパートの建物は亀裂が酷かったのですが、り災証明では一部損壊でした。しかし、自宅横の崖がいつ崩れてくるかが分からず、また子どもが「元のところには戻りたくない」と言うので、サラさんは新しい部屋を探しました。アパート解約の違約金を取られ、震災後1ヶ月程は住んでいないけど家賃も取られました。見つけたのは1DKの小さなアパート。家賃は以前のところの倍近くします。もっと家賃が安い所もあったのですが、なるべく丈夫そうな建物で、直ぐに入居できる場所を探していたので、サラさんは仕方がないと思っています。家移るにあたって、色々な支援があることは何となく聞いてはいましたが、詳しく知らなかったし、早く新しい所に落ち着きたいという気持ちが大きかったので、費用はすべて自分で出しました。

仕事は地震後再開しましたが、お客さんは減りました。「お金がなくなったのかな」と言って笑うサラさんは、いつかは昼間の仕事を見つけて、「普通に生活したい」と語りました。

■ マリーさんのストーリー

マリーさんは、日本人男性と結婚し、出産しましたが、その後離婚。現在は、子どもと2人で暮らしています。被災時は、故郷の国に残している、もう1人の子どもが短期滞在で熊本に来日していました。

4月14日～避難生活

マリーさんは、スナックでアルバイトをしている時に被災しました。自宅に子ども2人を残していました。同じアパートでよくお世話になっている女性に電話をし、子ども達の安否確認をしてもらいました。とにかく不安でたまりませんでした。地震の影響で、車を立体駐車場から出せなかったのも、タクシーで急いで帰りました。自宅のキャビネットは開き、食器が全部落ちて、かなりの物が壊れていました。帰ってもまだ揺れが続いていたので、3人で公園に歩いて行きました。しばらくして自宅に戻りました。この日の夜は少しは眠れました。

15日は車を職場に取りに行き、水などの買い出しに行きました。疲れて夜は早く寝ていました。しかし16日未明、大きな本震。電気が切れ、テレビも落ちてきました。マリーさんはパニックになり叫んでいたようで、子どもから「パニックにならないで。」と言われました。

マリーさんは、避難所に行ったら病気をもらうかとも思い、昼間は自宅、夕方からは、小学校での車中泊の避難生活を選びました。車の中ではよく眠れず、朝自宅に帰って眠ることもありました。

ガスはすぐ復旧しましたが、水は4月終わりまで復旧しませんでした。マリーさんは、水がこれほど大切だとは思いませんでした。

自宅の片づけは大変でした。炊飯器やテレビ、電化製品は壊れたので、新しい物を買わざるを得ませんでした。

マリーさんは、国際交流会館にも、相談や物資をもらうため、よく行きました。福岡に住む、同じ国出身の人達の炊き出しもありました。日本人もみんな助けてくれました。小学校の避難所では、自分より被害の大きい人がいると思い、あまり物資をもらいませんでした。

震災後2ヶ月ぐらいはじっとしていても体が震えました。マリーさんは、子どもの方が精神的に強かったと思っています。子どもの存在が何より助かりました。

震災と仕事

地震後から5月半ばまで、スナックでの仕事はありませんでした。手当もありませんでした。仕事がなく収入がないのに、水や食料、壊れた家電を購入しなければならない状態でした。また、故郷への仕送りもありました。経済的にとても大変な思い

をしました。家賃もしばらく滞納していた時期がありました。

マリーさんは、新しい仕事を探しに、ハローワークに行きましたが、コンピューターを使うまでに何時間も待たなければいけませんでした。昼間の仕事をしたいと思っていましたが、みんなが仕事を探している状態だったため、なかなか見つかりませんでした。

2016年10月、ようやく仕事が決まりました。現在のマリーさんの収入は、約13万円プラス児童手当と児童扶養手当です。その収入の中から、自分と子ども2人の生活のほかに、故郷に残している母親やもう1人の子どもに仕送りをしなければなりません。経済的にキツイと感じています。

マリーさんの夢は、今の仕事をきちんとこなして、子どもを立派に育てることです。仕事を休まぬよう、病気に気を付けています。経済的には苦しいため、本当は昼と夜を働きたいと思っていますが、自分の体調を考えて無理をしないようにしているとのことでした。



■ カレンさんのストーリー

カレンさんは、2度の離婚を経験しました。現在は、県南地域のアパートで子ども2人と暮らしています。

地震発生時のこと

4月14日に強い揺れがあったとき、カレンさんは子ども達と自宅にいました。初めての経験するような揺れで、心臓がドキドキし、子ども達も大変怖がっていました。外に出るのも怖かったので、家の中に留まりましたが、その後も何度も揺れが続き、朝まで眠れませんでした。

16日未明には更に大きな地震が発生。家の中が回っているようでした。外に避難しなければと思いタクシーを呼ぼうとしましたが、電話が繋がらず、フェイスブックで友人と連絡を取り迎えに来てもらい近くの公共施設へ避難しました。

18日、更に大きなショックがカレンさんを襲います。故郷にいる母親が急死したとの報せが入ったのです。母親は、地震のことをテレビで見て、カレンさんのことが心配で夜も眠れず、食欲もなくなり、血圧が上がり、倒れてそのまま亡くなったのだそうです。すぐにでも帰国したかったのですが、福岡空港までの道が通れず、22日に道路が復旧するまで待たなければなりませんでした。

子ども達のこと

子どもは2人とも、地震のストレスと避難所の寒さからか、避難所に移ってすぐ熱を出しました。また、避難生活では特に子どもの食事に苦勞しました。ただでさえ限られた食料しかないうえに、2人の子どもにはそれぞれアレルギーがあり、子どもが食べられる食料を調達するのが大変でした。また、4月19日まで、県南にあるその避難所で配給されたのは食料のみで、水はなく、衛生用品もありませんでした。

子ども達は今でも地震に敏感で、震度3程度の揺れが来ると飛び起きるようになりました。そのような時は敢えて冗談を言ったり、「ママがいるから大丈夫」と言ったりして、落ち着かせています。

外国人として困ったこと

有明海が近い、県南のその避難所では、地震で津波が起こったときの避難場所や避難方法が書いた紙が配られていました。しかし、カレンさんの他にも外国人の避難者がいましたが、みんな漢字が読めないののでどうしたらいいのか分からず、不安でした。実際に津波警報が発令したことがあり、津波からの避難に関する放送もあったようですが、意味が分からなかったため、車の中に逃げることはできませんでした。カレンさんは、津波が来たら諦めるしかないと思いました。

また、普段、「外国人はシングルマザーばかり」という偏見に触れたことがあったというカレンさんは、避難生活でもそれを感じることがありました。避難所で一緒になった年配の女性から、子どもが「お父さんはどこ?」「なんで一緒にいないの?」と話しかけられたりしました。

地震と、それに伴う母の死を乗り越えなければならなかったカレンさん。今でも大きな余震があると、ドキドキして眠れなくなってしまうといいます。それでもカレンさんは、「きついけど頑張る。お母さんだけん」といって明るく笑いました。

■ マリさんのストーリー

マリさんは日本人男性と結婚し、子ども2人を出産。夫のDVのため別居していたときに、被災しました。現在は子ども2人とアパートで暮らしており、実の母親も近くに住んでいます。平日の昼間はパートとして働き、週に数回、ホステスのアルバイトをすることもあります。

地震発生時のこと

4月14日の地震発生時、下の子どもは39度の熱を出していました。今まで経験したことのない大きな揺れに強い恐怖を感じ、パニックになりそうでしたが、子ども達と自分自身に大丈夫と言い聞かせて過ごしました。

15日の夜、ホステスのアルバイトのため、近くに住む母親に子どもを預け職場に行きましたが、地震の影響で職場は休みでした。仕方なく自宅に戻り、1人で寝ているときに、2度目の強い揺れに見舞われました。電気がつかず真っ暗な中、マリさんは1人だったので本当に怖かったといいます。近所の人は外に避難していましたが、マリさんは以前から、別居中の夫や不審者が現れるのではという不安感があり、真っ暗な中を1人で外に出ることができませんでした。フェイスブックで知人と連絡を取り合ったり、お祈りをしたりして、自分を勇気づけました。

家族の支え

夜が明けて、母の家に子どもを迎えに行きました。母のところに3日間避難し、その後は自宅に戻りました。しかし、自宅は電気が復旧しただけで、水とガスは3週間ほど止まっていました。自宅には食料はありましたが、食事は被害が少なかった母の家で済ませ、夜は自宅に帰って寝る生活を続けました。

母の家は平屋で庭も広く、母の家に居るときは恐怖感もなく、子ども達も安心して過ごしていました。学校が休校になった時も母が子ども達の面倒を見てくれたので、マリさんは昼間の仕事に行くことができました。困ったことがあったときや相談事は母親に話しているというマリさん。「やっぱり家族が一番」だと思っています。

心の変化

地震後マリさんは自分も子ども達も「心が変わった」と感じています。マリさんはしばらくは少しの揺れでも飛び上がって外に逃げようとしており、現在もあまり眠れず、毎日午前2、3時頃に目が覚めてしまいます。いまだに不安感が強く、夜の暗がりや怖いので、帰宅時、車から部屋に帰る時も急いで入っています。子どもは地震以来、留守番を嫌がるようになりました。子どもが変わってしまったことが可哀そうだし、心配もしています。マリさんは、シングルマザーは「安心じゃない」と感じています。1人でいるのは怖いし、「男性がいないと強くなれない」と感じました。

地震の情報と言葉の壁

マリさんは、地震に関する母国語での情報はなく、英語での情報もほとんどなかったので困った思いをしました。「避難所」などの言葉は難しく、自分で調べています。情報はフェイスブックで友達から得ることが多く、ホステスの仕事中心にお客さんから教えてもらうこともあります。り災証明については知りませんでした。家が壊れた人はお金がもらえるとか、修理をしてくれるということは職場で聞いたことがありました。

今後の夢は、子ども達のために自分の家を持つことだというマリさん。子どもには自分の好きなことをして生きてほしいと思っています。

■ リタさんのストーリー

リタさんは日本人男性と結婚後、出産直前に別居、その後離婚。言葉も文化も分からない中で一人での出産・育児はストレスも多く、帰国したいという思いもありましたが、子どもの将来を考えて日本での生活を決意しました。2016年4月に新たな仕事につき、働き始めたところでの被災でした。

4月14日前震発生時

リタさんは自宅で子どもと一緒にいる時に、強い揺れに襲われました。最初は何が起こったか分かりませんでした。地震と気づいた後も、それほど怖いとは思いませんでした。しかし、会社から電話があり、また大きな地震が来ると言われ、いきなり恐怖感に襲われ、体が震えました。また余震を知らせる携帯の警告音にも恐怖を煽られました。リタさんは、子どもを抱えてパジャマのままで家を出ましたが、どこで何をすべきか分かりませんでした。アパートの1階にあるレストランに行くと、お客さんが子どもの頭に鍋をかぶせてくれて、一緒に外に出ました。本当に怖くて涙が出ました。その時初めて、「やっぱり旦那さんいたらよかったな」、「男がいないと大変だな」と思いました。

外に出てみると、みんな「どこかに逃げている感じ」がしました。しかし、リタさんにはみんながどこに向かっているのか分かりませんでした。そこで道行く人を捕まえて、どこに行くのかを聞きました。その時に初めて「避難所」というものがあり、そこが逃げる場所であると知りました。それまでは「避難所」という言葉を聞いたこともなく、災害時に避難所へ行くということも知りませんでした。

レストランの人が近くの小学校が避難所になっていることを教えてくれて、同じアパートのお隣さんが車で小学校まで連れて行ってくれました。その後職場から連絡があり、その小学校は古くて危ないので職場に来るように言われ、迎えに来てくれました。地震後に故郷の家族から国際電話がありましたが、母親を心配させたくなかったので、「私の住んでいるところじゃないから心配しないで」と言いました。故郷の家族には「大丈夫、大丈夫」と言いましたが、本当は全然「大丈夫」ではありませんでした。

4月16日本震発生時

翌日の15日は、いつも通り仕事がありました。仕事を終えて、そのまま職場で子どもと寝ている時に本震に襲われました。職場の人が「ダンゴムシになって!」と叫びましたが、リタさんにはどういう意味か分かりませんでした。周りの人が体を丸くするのを見て、リタさんも子どもを抱えて体を丸めました。書類や食器など全て落ちてきて、職場は滅茶苦茶でした。前震の時とは比較にならないほどの恐怖を感じました。職場の人が

一緒ではなかったら死んでいた、とさえ思いました。

公民館での避難生活

その後2週間、リタさんは職場近くの公民館で避難生活を送りました。朝7時に起きて仕事に行き、夕方公民館に帰るという生活を続けました。

公民館では食料の配給があり、また、みんなで一緒にご飯を作ったりもしました。公民館でも2週間程は水が出ませんでした。男性たちがどこからか毎日黒い水を汲み取ってきたので、それをトイレ用に使いました。リタさんは避難生活中は生理中でしたが、大人用のオムツを代用していました。下半身を洗うのも、まずは真っ黒の水を使い、最後に分けてもらった飲み水で洗いました。職場の人から温泉に連れてくと言われたけど、温泉に入るために2〜3時間待つのも嫌だったし、入浴中に地震があったらと思うと怖くてお風呂には2週間程入りませんでした。初めの頃は、顔も洗えずに仕事に行っていました。

寝る時は、大きな部屋に布団を2列に敷き、1列は女性、もう1列は男性と、みんなで並んだ状態で寝ました。プライバシーはありませんでした。物を自宅に取りに行くのも怖くて、着替えにも事欠きました。下着だけはトイレで着替えましたが、その他は3日に1度ほどしか替えませんでした。

常に地震が怖く恐怖感があり、また不衛生な状態で過ごしました。そのためか、地震後1週間頃に、体調を崩してしまいました。胃が痛く、下痢と嘔吐が止まらなくなり、病院で治療を受けました。

リタさんは、避難所として閉鎖されるまで、公民館にいました。自宅に戻った時には電気自体は通っていましたが、ライトが全て壊れていたもので、明かりが無い状態でした。水はまだ復旧しておらず、食事は会社で食べたり、下のレストランの炊き出しを利用したりしました。家の中の被害は酷かったのですが、ボランティアの存在も知らずに、1人で片づけをしました。

避難生活中にありがたかったこと

リタさんは、職場や公民館の存在に大きく助けられたと感じています。地震後も仕事が途切れることなく継続して働けたので、経済的に助かりました。また、一緒に働いている人達がいるお陰で、精神的な支えにもなりました。保育園は前震後、1か月ほど閉鎖していましたが、職場は子育てに理解があり、保育園が閉鎖している間は、子どもを仕事場に一緒に連れて行くことができました。

避難所となった公民館には、リタさんの普段からの顔見知りの民生委員や、近所の人達も一緒にいて、心強く思いました。お母さんたちが塗り絵や折り紙など持ってきてくれて、リタさんの子どももみんなと遊んで楽しそうにしていました。食事なども

子どもがいるからと優先的にもらうことができました。

地震は大変でしたが、本当に色々な人によくしてもらい、良い経験にもなり、もっと日本が好きになった、とリタさんは思っています。「周囲の人たちや、コムスタカなど、何かがあっても助けを求めるところがあるので安心している」と語ってくれました。

現在の生活上での困難・不安

一方で、リタさんは、言葉も文化も分からないことが沢山あると感じています。被災者支援については聞いたことはありますが、よく分からないそうです。インタビューの時点で、リタさんは「半壊」や「全壊」という言葉は知っていましたが、「り災証明」の存在は、知らなかったそうです。

今後について

地震の時に色々な人に助けてもらったので、リタさんも「人の役に立てるよう勉強がしたい。」と思っています。市役所でレスキューの免許が取れるセミナーがあると聞いたので、それを取ろうと思っているそうです。また、子どもがちゃんと自立できるように育てていきたいし、できたら子どもを大学まで行かせたい、と語ってくれました。



課題と提言

平常時でも決して楽とは言えない生活をしている外国人シングルマザー世帯に熊本地震が追い打ちをかけた。熊本の広い範囲が被害を受け、熊本の経済活動はしばらくの間停止。非正規雇用で十分な補償もなく、外国人シングルマザー達の収入は減少または無収入となった。夜の仕事をしていた子どもと離れて被災した人も多く、地震への恐怖だけではなく、子どもと離れていることの不安を強く感じていた。その後も止まらない地震の揺れの中で、子どもと離れて仕事に行くことができずに、また他に子どもを託せる家族等もおらずに、仕事再開後も休みを取り、また無収入となり、生活はより一層厳しくなった。

また、彼女たちにとって、子ども達の感じているストレスも課題のひとつである。精神面への影響については、熊本県内の児童生徒約17万人を対象とした調査において、4,277人にカウンセリングが必要であると認められたことが、2016年5月30日に県教育委員会等のまとめで明らかになった。（「カウンセリング4000人必要」『日本経済新聞』（西部版）2016.5.31）本調査でも、熊本地震を経験した子どもを持つ外国人シングルマザーの半数以上が、震災後に子どもが何らかの精神的不安定さや行動の変化が見られたと話している。中には、母親と離れ一人で被災した子どももあり、その子の感じた恐怖とストレスは尚更のものであったであろう。しかし、支援に関する情報は、外国人シングルマザー達に十分に行き届いておらず、母親以外に子どもに配慮してくれる個人や団体の存在がなければ、外国人シングルマザーの子ども達の心のケアは十分に行われていないのではないかと考えられる。

現在の熊本では、日本語に不慣れな人に対しての、多言語および「やさしい日本語」での情報は限られている。熊本地震発災直後は、多言語での情報は皆無に等しかった。平時より熊本県及び熊本市のウェブサイトでは英語・中国語・韓国語への自動翻訳機能を備えているのみで、発災時には熊本県及び熊本市の多言語の嘱託職員が情報発信や外国人被災者への支援活動を行うことはなく、熊本地震に対する募金の呼びかけが、ウェブサイト上で行われた程度だった。熊本市国際交流振興事業団（以下KIF）は、英語・中国語・韓国語で生活情報を発信しているが、熊本地震の時は、想定外での外国人専用の避難所運営に追われていたため、災害多言語センターを立ち上げて多言語情報発信をし始めたのが、4月23日になってからだ。熊本市は、震災後定期的に発行している「熊本地震被災者生活支援情報」の2016年7月版を、「被災者生活支援ガイドブック」として、日本語の他に英語・中国語・韓国でも発行したが、それ以降は多言語では発行されていない。本調査に協力してくれた外国人シングルマザー

達は、日本語での会話はある程度できるが、読み書きは困難な人が大多数だ。ゆえに、外国人シングルマザー達が、公的機関が発信する震災や被災者支援情報を直接得ることはほぼなかった。

更に、日本で生まれ育ち教育を受け働いているならば、実際に地震を経験したり、災害や防災に関してもある程度の知識を持ちわせているかもしれないが、外国で生まれ育ったシングルマザーの中には、災害の経験も防災教育も受けたこともなく、災害時に対しての知識を持ち合わせていない人が少なくない。過去の経験や学習を通じて身に付けている情報の違いや、理解できる情報が不足していたため、外国人シングルマザー達は、発災時にどのような行動をすれば良いのか、どこに逃げればよいのか、何をすれば良いのか分からずに、立ちすくむこととなってしまった。また震災後の被災者支援策の申請方法や内容はもとより、その存在自体を知らない外国人シングルマザーがほとんどだ。支援策を知らずに申請ができない、支援策を知っていたとしても、言葉や心の壁等の理由で申請ができない等、実際に支援に繋がらない。地震後に生活が一層苦しくなった外国人シングルマザーにも、また心のケアが必要とされるその子ども達にも、十分な配慮や支援が行われずに復興から取り残されていき、結果として更なる貧困や心の傷に繋がってしまうことが懸念される。

これら、熊本地震によって外国人シングルマザー達が直面している問題は、普段から彼女らが抱える問題が顕在化されたものである。国際結婚、日本への移住、その後離婚を経験し、子どもの将来を考え日本での生活を決意しても、外国人シングルマザーとして、日本で生活することは容易ではない。大きな課題の一つとして、就労の難しさがある。日本語能力や資格制度の違い、雇用主や社会の偏見をはじめ、子育て中であれば就業時間・場所等が問題となり、外国人シングルマザーの就労の機会は減る。外国人として、シングルマザーとして様々な壁があり、結果的に、外国人シングルマザーの就労形態の多くは、不安定な非正規のパートタイムやアルバイトである。低賃金で短時間の仕事が多く、子どもが幼いと、急な病気で仕事を休まなくてはならないこともあり、給与収入と児童手当、児童扶養手当で毎月ギリギリの生活を送っている。子どもが就学すると出費が増え、一つの仕事では家計を支えられずに、仕事の掛け持ちをする人も少なくない。休みなく働いているが、それでも生活は苦しい。仕事と育児で忙しく、体調を崩す人もいるが、仕事を休むと非正規雇用で補償もつかず収入が減ってしまう。周りに家族がいると、子どもを預けたり、金銭的にも少しは頼れるかもしれないが、外国人シングルマザーで頼れる家族が周りにいるケースは少ない。日本でのひとり親世帯の貧困率は50.8%と言われるが(厚生労働省・2016年)、本調査

ではそれ以上の割合で外国人シングルマザー達の生活は厳しいようであった。

外国人シングルマザー世帯の貧困の要因の一つとして、父親の不存在とそれを容認する社会構造がある。様々な理由で父子が離れて生活しているが、離別後も子どもの父親として責任を果たしている男性は少ない。本調査で養育費を受け取っていると答えたのは、僅か5名で、「子どもの塾代を払ってもらっている」、「時々困っている時にお金をくれる」など多少の金銭的なやり取りが発生しているもの5名のみだった。男女2人の存在があり初めて存在する子どもであるにも関わらず、離別後は男性は「父親」という責任を放棄し、女性が「母親」として全ての責任と負担を強いられている。これは、責任を放棄している日本人男性個人の問題のみではなく、それを容認し可能にしている日本の社会構造にも問題があると思う。

外国人シングルマザーの抱える問題として、子育ての問題もある。慣れない言語や文化、社会の中で家族のサポートもなく、子育てをする不安やストレスは計り知れない。子どもを育てるために、仕事の掛け持ちや時給の高い夜間の仕事をする外国人シングルマザーも少なくなく、仕事が忙しく子どもとの時間が取れずに、子どもに寂しい思いをさせていると話す女性も多かった。外国人シングルマザーの子どもの中には、学童期は母親の母国で祖父母等と生活し、ある程度の年齢に達してから来日し、母親と生活し始める子どももいる。日本語による授業やコミュニケーションの難しさ、周囲からの偏見、いじめや不登校から非行に発展するケースも十分に考えられる。長年離れて生活していた母子の間に、心の溝が存在する場合もある。何らかの対策をしなければ、子ども世代への貧困の連鎖にもなりかねない。

熊本県及び熊本市は、子ども・子育て支援事業計画を立て、安心して子どもを生み育てられるように、子育て家庭を対象に、様々な支援策を実施しているが、外国人シングルマザー家庭に十分な支援が届いているとは言えない。被災者支援同様、外国人シングルマザーは、支援制度にたどり着くことができないでおり、また現存する支援制度が、外国人シングルマザーにとって利用しにくいものであると考えられる。現存の就労支援は、言語の壁がある外国人シングルマザー達に特化された支援内容とはなっておらず、熊本市の子ども支援課によると、過去3年間の記録では母子・父子自立支援プログラム策定事業や母子家庭等自立支援給付金事業において、外国人シングルマザーの利用はない。子育て支援事業も申請方法や時間帯等の制限により、外国人のみではなくシングルマザーにとって利用しやすいものかも疑問だ。また、筆者による同行支援の経験より、外国人シングルマザーも支援対象に含まれるので支援制度の利用は認めるが、子育てに悩むシングルマザーに寄り添って支援していくという態度が微塵にも感じられない支援事業担当者も少なくない。結果、外国人シングルマザー達は、

公的支援制度を利用することが憚られ、個人が持つネットワークを駆使して、自力で何とか生き抜いていかざるを得なくなっている。

外国人シングルマザーやその子ども達も、熊本で生活する地域社会の一員であり、同じ熊本地震の被災者である。地域社会の一員として、熊本地震の被災者として、外国人シングルマザー達にも、情報や支援が行き届くようにすべきではないだろうか。そのためには、日本語に不慣れな人でも理解ができるよう、公的機関が正確な情報源として責任を持ち、やさしい日本語や多言語でも情報提供を行うことが求められる。また支援機関が、外国人シングルマザーにとってアクセスしやすい環境を整えることが必要だ。被災者支援制度はただでさえ複雑で、申請要件や申請方法、申請先等日本人にとってすら頭を悩ますものである。外国人シングルマザーが適切な支援を受けるためには、彼女たちの置かれている状況を理解し、申請の必要書類等の入手や窓口への説明、申請書の記入等、彼女たちに寄り添って、申請のプロセスを共に行う同行支援が必要だ。また支援担当職員も、外国人の抱える問題や課題を理解し、地域住民として寄り添う姿勢を持ち、外国人が窓口を訪れた時に適切に対応し、公共サービスを当たり前提供できるようにしておくことが求められる。

更に支援者は、外国人シングルマザー達と常日頃から繋がりを持つておくことが不可欠だと考える。限られているとは言え、熊本地震の被災者支援情報に関してKIFや大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム、及び当団体では多言語及びやさしい日本語での情報発信を行ってきた。しかし、これらの機関が発信していたはずの多言語及びやさしい日本語での情報は、ほとんど外国人シングルマザーには届いていなかった。外国人シングルマザー達の主な情報源は、公的機関等ではなく、友人や同僚など常日頃から繋がりを持つ人である。震災後の避難や食料、水等の支援も、彼女らがこれまでに築いてきたネットワークを駆使して得ていることがほとんどであった。つまり、常日頃から多言語情報を発信し続けておくことで、シングルマザーを含む外国人住民の間で多言語情報源との周知が進むであろう。そして、支援機関が外国人シングルマザー達に対しても適切なサービスが提供できるようにしておくことで、外国人シングルマザー達と繋がり形成され、その繋がり、震災時及び震災後の情報提供や支援にも結び付くのではないかと思う。

熊本地震により外国人シングルマザー達の生活は一層厳しいものとなった。その根源には、平常時から彼女たちが直面している問題がある。熊本地震で被災した外国人シングルマザー達を支援するには、彼女たちが平常時から抱える課題に取り組み、生活の底上げをすることが不可欠だと考える。

震災時の多文化共生 ～今後に向けて～

熊本地震とコムスタカの外国人被災者救援—支援活動の取組み

コムスタカ—外国人と共に生きる会代表 中島 眞一郎

1. 蓄積ゼロからの外国人被災者救援活動

私自身も、またコムスタカも、これまで大きな地震の被災者に自らがなることを全く想定していませんでした。そして、防災対策や、被災後に具体的のどのように行動するかという検討もしたことがなく、むしろマニュアルもありませんでした。その意味では、蓄積ゼロからのスタートでした。

しかし、4月14日夜の熊本地震発生の翌日4月15日からコムスタカとして外国人被災者救援活動に取り組むことができました。なぜそれが可能となったかは、自らが被災者となった時、地震の揺れへの恐怖、自らの生命身体の安全や生活や仕事を失うことへの不安と共に、これまでコムスタカに相談にきた外国人たちがどのような状態になっているか、ライフラインが止まり交通アクセスがなくなる状況下で日本人以上の不安と困難を抱えていると想像することができたからです。

そして何ができるかと考えた時、偶然でしたが、4月15日朝、熊本市国際交流会館が避難所になっていることをホームページで知り、旧知の八木浩光事務局長に電話して「熊本市国際交流会館が外国人専用の避難所となっていること、国際交流会館のいくつかの電話のうち一つを英語と中国語が対応できる多言語対応の外国人専用電話とすること、電子メールやSNSを通じてその情報を流すこと」への了解を取り、情報を流しました。

私自身、4月15日の夜、再び前夜の揺れを上回る猛烈な揺れが来るとは夢にも思わず、昼間自宅と事務所の片づけをして、自宅で寝ていたため、2度も被災してしまいました。4月16日には外国人だけでなく日本人も含む多くの被災者が熊本市国際交流会館に避難していました。コムスタカのメンバーも皆被災し、市外や県外に避難した人、被災して動けない人が大半で、救援活動に動けるのは、私を含めて数人しかいませんでした。取りあえず16日に、国際交流会館へ米などの食料品を差し入れに行きました。また、国際交流会館は行政の指定避難所ではないため、食料が来ないことがわかり、避難者で館外の公開敷地で炊き出しが行われるようになりました。炊き出しのための食材の差し入れや炊き出しへの寄付の要請、被災地の状況などをコムスタカの関係者や各メーリングリスト等を通じて電子メールで16日から以下のように発信し始めました。

熊本地震 外国人被災者に心を寄せていただける皆さんへ(その1)

2016年4月16日

中島 眞一郎(コムスタカー外国人と共に生きる会)

4月14日及び4月16日の熊本地震で被災された皆さんへお見舞い申し上げます。

4月15日 熊本市国際交流会館が、外国人への緊急避難所として開設されている旨お知らせしました。4月16日午後8時現在 日本人の被災者を含めて在住外国人ら被災者約60名が避難されています。この施設は行政の正式な避難所としての指定がないため、一時避難所や宿泊先としての提供はありますが、食料などの備蓄や配給がありません。施設の職員の方や民間の方の協力で炊き出しが行われていますが、材料がたらず十分賄うことができません。熊本市内在住の方で米や野菜、肉などの材料など現物の寄付が可能な方は、熊本市中央区花畑町4-18 熊本市国際交流会館へ直接もって来てください。それから、今後避難がより長期化するかもしれません。被災者支援や炊き出しなどのための費用の寄付をお願いします。新たな専用口座を作る時間がないので、寄付金の送付先を、コムスタカー外国人と共に生きる会の会員や寄付の送付先口座を利用することにしますが、ご送金いただける方には通信欄に(地震)被災者支援のためなどと明記してください。

郵便振替口座番号 01970-4-26534

郵便振替口座名 コムスタカ

これ以降、私の発信した被災地からの通信が、被災者に何か支援したいと思われていた全国の移住労働者問題や外国人問題に関心のある方々に次々と転送されて、寄付金の送金や支援物資の提供の申し出が相次ぎました。

2. コムスタカの被災外国人への緊急救援活動

コムスタカは、熊本地震が発生した4月14日の翌日の4月15日から、在住外国人被災者支援のため、熊本市中央区にある熊本市国際交流会館が外国人への緊急避難所として開設されていることと、多言語対応ができる外国人専用の相談電話番号を、コムスタカにこれまで関係してきた外国人らに電子メールやSNSなどで知らせました。また、コムスタカのホームページにおいても、翻訳ボランティアの方々の協力を得て、

日本語ばかりの地震情報の、英語や中国語、韓国語だけではなく、インドネシア語やベトナム語、タイ語等を含む多言語による発信を始めました。

外国人の避難所となった熊本市国際交流会館で、熊本市など行政からの食料供給とは別に、熊本市国際交流会館玄関前の公開敷地で、4月16日から17日までは、避難者の自主的な炊き出しとコムスタカなどのボランティア団体による支援物資の差し入れで、4月18日から4月30日まではコムスタカの責任で炊き出しを行い避難者に温かい食事を提供しました。地震後1週間は、100食程度提供してきました。2週間目から閉鎖される4月30日までは、40食から70食を提供してきました。

熊本市国際交流会館でのコムスタカによる4月18日から4月30日の炊き出しのメニュー

※(4月16日(土)及び17日(日))は、避難者による温かいおにぎりとおみそ汁の炊き出し

4月18日(月) 肉なしの野菜カレー

4月19日(火) だご汁・ゆで卵・おにぎり

4月20日(水) 中国人技能実習生の避難者による中華料理

(肉ナスの炒め・トマトと卵の炒めもの・チャーハンと白米のご飯を選択)

4月21日(木) チキンカレー・食パン

4月22日(金) フィリピン料理…チキンアドガボ(フィリピン式野菜炒め)・

サラダ・フィリピン式デザート

(このあたりまでは平均100食程度供給)

4月23日(木) 水餃子・大根サラダ・アルファーマ

(高校生のボランティアによる炊き出しがあるとの連絡で炊き出しを中止したが、当日其れは誤報であると分かり、急遽、コムスタカが炊き出しを行う)

4月24日(金) アロズカルド(フィリピン風ぞうすい)・

ギニカンラバナス(チキンと大根の炒めもの)・なすとトマトのサラダ

4月25日(土) チキンアドボ(フィリピン風野菜煮込み)・

ソーバス(フィリピン風スープ)

4月26日(日) パンシットギサド(ピーフンとチキンと野菜の炒めもの)・サラダ

4月27日(月) ソテイトマト(トマトとチキンと玉ねぎの炒めもの)・サラダ

4月28日(火) チキンカレー・ツナサラダ

4月29日(水) 福岡教区のカトリック信者らによるドライカレー

4月30日(木) 焼き肉丼(牛肉と豚肉を使う)

※翌日から避難所閉鎖を迎えた最後の晩餐で鶏肉以外に肉を食べたいという希望が多かったため

熊本市中央区花畑町にある熊本市国際交流会館には、地震発生当初は、30名～40名の外国人、40名ほどの日本人家族ら合計70～80名が避難生活をしていました。国籍はバングラデッシュ、中国、韓国、マレーシア、スリランカ、タンザニア、フィリピン、フランス等で、在留資格も留学、永住者、技能実習、家族滞在など様々でした。

地震当初は、空港・高速道路・JRなど交通インフラがすべて止まって、熊本は一時陸の孤島化し、また、電気・水道・ガス等ライフラインが止まるなかでの不安な避難生活でした。地震

後1週間程が経過し、交通インフラが徐々に回復してきて、ライフラインの復旧が進み、避難所から自宅に戻る人や熊本県外や国外へ移動する人なども増えていきました。そして、地震後2週目となる4月22日以降は国際交流会館に

は外国人15～20名、日本人20名弱の30数名が避難生活をしていました。熊本市国際交流会館の避難所は、当初4月17日までの予定でしたが、4月20日、4月24日、さらに4月30日と延長され、同日閉鎖されました。また、避難している外国人家族の避難所退所後の転居先の確保の相談や諸手続きへの同行支援、在住外国人の中でも社会的弱者であるDV被害者や生活困窮者、シングルマザーなどコムスタカへ相談が寄せられていた外国人の安否確認や被災状況把握、今後の生活や就労問題等の相談に取り組みました。



3. コムスタカの熊本地震！外国人被災者に対する中長期の支援活動

コムスタカー外国人と共に生きる会では、全国各地の皆さんから送金いただいた寄付金をもとに、2016年4月中の炊き出しなどの緊急避難救援活動から、同年5月以降は、緊急支援活動とともに外国人被災者への中長期的な取り組みも視野に入れた支援活動へ切り替え、以下のような取り組みを行っています。

① 震災関連の多言語情報の継続的提供

やさしい日本語、英語、中国語、韓国語、ベトナム語、フィリピン語、タイ語、インドネシア語、ネパール語の9か国語で熊本地震災害関連情報をコムスタカのホームページ上で、継続的に更新しながら提供しています。

<http://kumustaka.weebly.com/>

② 緊急融資

在住外国人の帰宅困難者や生活困窮者、シングルマザー等を対象とし、30名余りに緊急融資をしています。

③ 生活自立支援相談

2016年4月被災以降約70ケースのDV被害者やシングルマザーら在住外国人被災者からの相談に対応しています。

④ 在住外国人支援の取り組みや今後の被災者の課題を考えるイベント企画

① 2016年7月3日

「熊本地震！外国人被災者救援活動の歩みと課題を考えるシンポジウム」
(くまもと県民交流館パレア会議室・約80名参加)

② 2016年10月23日

「DVをなくすために～DV加害者対策を考えるシンポジウム」
(くまもと県民交流館パレア会議室・約50名参加)

③ 2017年2月12日

「移民と人権－アメリカの移民政策に学びながら、日本の外国人政策を考えるシンポジウム」(くまもと県民交流館パレア会議室・約50名参加)

⑤ 在住外国人シングルマザー被災者を対象とした実態調査

2016年7月から2017年1月の約半年間に30名の外国出身シングルマザーを対象に被災体験等のインタビュー調査を行い、調査結果をまとめた報告書や提言を2017年7月9日に発刊しました。

⑥ 他団体との連携活動

熊本地震からの復旧・復興計画へのため、よか隊ネットや未来ネットへ加盟し、他のNPO・NGOと連携を行っています。

⑦ 熊本地震での外国人被災者救援活動や支援活動の体験を発表

震災後の1年間で、講演やパネリストの依頼が15か所(県内外の大学、フィリピン人会、熊本市国際交流振興事業団、県外のNPOやNGO、行政機関など)からあり、熊本地震外国人被災者救援・支援活動の経験と災害時の多文化共生の課題について報告しました。

4. 熊本地震から1年数ヶ月を経過して

2016年4月の熊本地震から1年数ヶ月が経過しました。熊本県内の被災地では避難所が2016年11月17日ですべて閉鎖され、被災者は、移住、あるいは自宅に戻り、あるいは仮設住宅やみなし仮設住宅に転居して暮らしています。被災した道路や橋などインフラの復旧、住宅やビルなど建物の解体や新築、修復工事などが次々と行われ、公的補助やグループ補助などによる復興需要と人手不足により、企業の倒産や失業者の増加は見られず、表面上は復旧や復興へむけて急速に進んでいるように思えます。

しかし、被災を契機とする後継者不足による廃業の増加、熊本県内への企業の立地の減少、観光客などの減少がみられ、復旧復興需要が一段落した後に更なる地震の影響が出てくると考えられます。また、熊本地震の被災者の間では、避難生活の長期化から震災関連死が増大しています。これは氷山の一角で、被災の恐怖や不安、避難生活の長期化の影響は、今後、震災関連死の認定を受けられない被災者の死亡、自殺、精神疾患、DV被害、生活困窮などの増加をもたらす、様々な影響を与えていくものと考えられます。

実際に熊本地震から6ヶ月経過した2016年10月以降は、コムスタカに寄せられる外国人からの相談の内容も、直接被災の影響によるものとは思いますが、自殺、自殺未遂、配偶者の失踪、配偶者からの遺棄、DV被害、生活困窮など深刻な内容の相談が増加してきました。

この1年数ヶ月の間に、外国人被災者、その中でも特にDV被害者や生活困窮者、シングルマザー、刑事被告人の個別相談に多くの時間を割いて活動してきました。そして、普段から直面している問題にプラスして被災するという困難を抱えながら、相談者の多くが、この1年間に確実に問題解決へ向けて歩んでいっています。

避難生活を体験したDV被害者らから「裁判所の調停、協議により加害者の配偶者と合意して離婚が成立でき、納得できる解決になった」「自動車免許を取り、就労先を見つけ、生活保護から自立できるようになった」「子どもの保育園への入園や新規の就労がきまった」等の声が聞かれたり、刑事被告人の被災者が、判決が言い渡され、釈放されて更生へ向けて歩んでいたり、「学校でいじめにあい、長年引きこもっていた子どもが、避難所での集団活動等の体験をへて家の外に出て働けるようになった」という人もいます。熊本地震という被災体験の現実を踏まえながら、今後とも外国人の相談に対応していきたいと考えています。

熊本地震の被災体験から見てきた災害時の多文化共生の課題と提言

中 島 眞一郎（コムスタカー外国人と共に生きる会代表）

1. 熊本地震での発災直後から応急対応での行政等の課題

熊本地震発災後、特に4月16日の本震以後、熊本市国際交流振興事業団（以下、KIF）による熊本市国際交流会館での外国人向け避難所としての活動は、行政による応急対応として全国的にも国際的にも高く評価されています。しかし、それは偶然とこれまでのKIFの多文化共生のための活動の蓄積と民間団体等との協力の結果、成し遂げられたもので、いわば「奇跡の結晶」であって、かならずしも行政の功績ではありませんでした。

熊本市は、平成27年度計画において、大規模な災害発生時に、国際交流会館を外国人避難対応施設として開設すると明記していました。しかし、外国人避難対応施設の設置主体や運営主体がどうなるか等の具体的な手順は何も決まっておらず、またあくまでも開館時間内に対応する一時避難所としてしか想定されておらず、KIFによる24時間外国人避難所活動はあらかじめ想定されていたものではありませんでした。4月16日の本震以降、同施設が24時間避難所となったのは偶然であり、指定避難所以外の他の多くの避難所と同様に、多くの被災者が施設内に避難してきたため、なし崩し的に24時間避難所となったにすぎません。そのため、避難所の運営主体となったKIFは、24時間避難所の運営マニュアルもないなかで、手探りで運営していくこととなりました。避難所運営に忙殺され、外国人被災者への多言語情報による防災情報の発信は、4月23日以降から、また、各地区の指定避難所への巡回活動は、外部支援を得られるようになった4月20日以降からしか行えませんでした。

熊本市の防災会議にそもそも国際課が出席しておらず、4月20日に外部支援者から行政の防災情報をもらえることを指摘されるまで、国際課やKIFもその事実を知りませんでした。この事からも27年度計画での外国人被災者への多言語情報の発信は、防災会議に基づく行政情報を発災直後から発信する具体性につけ、紙の上のものでしかありませんでした。この結果、行政レベルの対応で見ると、熊本地震では、発災直後から1週間以上、外国人被災者は日本語のみの防災情報の中で逃げ惑うことになりました。また、熊本市の各避難所（指定避難所として追加された避難所を含む）では、外国人避難者や日本語が不十分な避難者の存在の把握をしておらず、要配慮者として配慮はほとんどなされていませんでした。以上、外国人被災者に対する熊本地震の発

災後1週間程度の応急対応に限定しても、熊本市の対応は、以下のような多くの課題を抱えていました。

- ① 災害関連情報の多言語提供が、発災後1週間以上遅れてしかなされなかった。
- ② 外国人向け避難所を開館時間内の一時難所としてか想定しておらず、24時間避難所となることを想定していなかった。
- ③ 避難者数や避難期間を想定できず、避難所の逐次追加と避難所開設期間の逐次延長を繰り返した
- ④ 各地区の指定避難所に外国人避難者がいることを想定した対応がなされていなかった
- ⑤ 大規模災害時の外国人被災者に対応する責任や運営主体が決まっておらず、災害時の具体的なマニュアルがなく、多言語能力を有する嘱託職員や相談員の活用もできていなかった。

これらの背景には、熊本地震のような大規模災害を具体的に想定できていなかったことと、関連部局となる政策局国際課が、被災者となりうる在住外国人を対象とする多文化共生政策をほとんど行っておらず、外国人被災者への関心や対応機関としての意識が欠如していることにあります。

2. 今後、行政等が外国人对策などで改めるべき課題と提言

- ① 行政の防災計画に外国人被災者に対応する機関を明記し、責任主体を明確にするとともに、その機関を中心に災害発生時に外国人被災者の救援や支援のために活動する。
- ② 災害発生直後から、災害関連情報を訪日外国人向けだけでなく在住外国人の言語も含めた多言語で発信できるようにする。
- ③ 情報センター機能をあわせた24時間対応の外国人向けの避難所の設置を明記する。なお、熊本市国際交流会館を指定避難所とする場合には、指定監理団体に外国人向け災害対応ができる能力を持つ団体を指定し、その団体に運営責任を果たすことのできる権限と予算をつける。
- ④ 外国人が宿泊している旅館やホテルなどの宿泊施設や留学生のいる大学、技能実習生の監理団体や実習実施機関等へ、外国人情報センターの存在の周知を行い相互連絡可能な仕組みを作る。
- ⑤ 各避難所で、外国人や日本語の理解が不十分な避難者がいることを意識し、その把握や登録を当たり前のこととする。
- ⑥ 車中泊等外国人の屋外避難者を把握できるための巡回活動。

- ⑦ 災害時に外国人避難者の相談に対応できる（多言語あるいは、やさしい日本語をつかう）相談員の配置を行い、そのための人材を養成していく仕組みを作る。
- ⑧ 熊本県や熊本県国際協会、他の市町村や国際協会等と災害時に連携をできるように、普段から連絡協力できる仕組みを作っておく。

以上の課題と提言を踏まえて、外国人や訪日外国人を含む観光客に対する行政の地域防災計画について、真摯な反省と検討による大幅な見直しと変更こそが求められています。現在の行政等の在り方は、外国人を観光客誘致という経済的利益の対象者としてしか見ておらず、熊本地震の被災体験を経て、災害時に訪日外国人や在住外国人を含めた外国人に安心安全を提供できるあり方への転換が、今こそ求められています。

平成28年4月以降の熊本地震をへて、熊本県及び熊本市は地域防災計画を見直しました。外国人被災者対応について変更となった部分を示しておきます。

1、平成29年度 熊本県地域防災計画の修正

熊本県は、平成29年度地域防災計画の見直しを、平成29年4月19日付で、熊本県ホームページで公表しています。その中で、外国人被災者への対応について、以下のような見直しが行われています（外国人被災者対応として新たに設けられ規定）。

県は、災害対策本部内に外国人支援班を設置し、市町村と協力して外国人の避難状況の把握を行うほか、避難所における外国人の支援を行う。

（一般災害対策編）第3章 第1節 新旧表 3－8頁）

外国人支援班（国際課）の分掌事務 （第3章 第1節 新旧表 3－8頁）

1. 外国人被災者の状況（国籍、性別、人数等）及び避難状況の把握に関する事項
2. 避難所における外国人支援に関する事項
3. 県ホームページ等による多言語での情報提供に関する事項
4. 駐日外国公館（大使館・領事館）等との連絡調整・帰国支援に関する事項

コメント（中島）

熊本県及び熊本市を除く市町村は、熊本地震の外国人被災者への対応はほとんどできておらず、今回の見直しで、県が災害対策本部内で外国人支援班を設置し、上記の分掌事務の4つを明記していることは評価できます。コムスタカから行政の外国人被災者対応の課題について指摘していたことがある程度反映され、県行政として熊本地震での外国人被災者への対応の問題点が意識され、その反省の上に計画の見直しがなされています。但し、外国人支援班を担う国際課は、セクションも5つに拡大され、職員数も20名を超えていますが、多文化共生を担う職員は1名しかいません。大規模災害時に嘱託員も含めて国際課全員で外国人支援班を担う体制が作れないと分掌事務を担うことは不可能と思われます。マンパワーやその費用をどのようにまかなうかという具体策がないと、紙の上だけの修正に終わりがねません。分掌事務の一つ一つの課題への具体化が求められています。

2、平成29年度 熊本市地域防災計画の修正

(以下、引用です)

■ 外国人に対する対策

外国人は、言葉や文化・生活習慣の違いが原因となり、防災に関する情報や災害時における緊急情報、避難勧告等が理解できず的確な避難行動が取れない可能性があり、被害を受けることが考えられる。このため、日頃から十分な防災対策を行う必要がある。

(1) 外国人への情報提供等

国際交流会館において、日頃から多言語での相談窓口を設置するなど、外国人への情報提供に努めるとともに、市の窓口においては、手続き・相談を円滑に行うため、通訳等の支援に努めるものとする。国際交流会館の指定管理者は、「市政だより」の暮らし、健康に関する情報や本市で外国人が生活する上で必要となる情報を英語・中国語・韓国語に翻訳し、独自のホームページに掲載するとともに、警報以上の災害情報が出された場合には、多言語防災メールへ登録している外国人へ災害情報を配信するなど情報提供を行うものとする。また、防災カードを多言語で作成し、外国人への配布に努めるものとする。

(2) 関係各所との連携

災害時に備えて、国際交流会館の指定管理者、県・市町村、各大学、民間団体、在熊の外国人コミュニティ及び自治会等との連携を図り、防災意識の啓発や、外国人が防災訓練等の地域活動へ積極的に参加できる環境づくりに努めるものとする。また、傷病者に備えて外国語で診療を受けることができる医療機関を把握するとともに、医療機関との連携を深めておくこととする。非常時においては、外国人への配慮が欠如することのないよう、地域住民との協働で災害時でも役立つ日本語講座を実施することなどにより、地域と外国人との顔の見える関係づくりを促進していくものとする。

【関連部局】 政策局

(3) 大規模災害時の対策

大規模災害発生時においては、政策局対策部により、外国人避難対応施設として国際交流会館を避難所として開設するものとする。発災後は、国際交流会館の指定管理者や関係機関等と連携し、速やかに情報収集や多言語翻訳を行い、市のホームページやSNS等を通して、外国人への情報提供を行うものとする。また、市等から発信される災害情報を円滑に提供できるように、災害多言語支援センターの設置に努めるものとする。併せて、外国人避難者を把握するために、各避難所での登録状況の把握や関係機関等への情報収集を行い、野外等の避難者に対してはSNS等を活用した状況把握に努めるものとする。また、各避難所においては、多言語化された情報提供に努めるものとする。

■外国人避難対応施設

施設名	住所	電話番号
熊本市国際交流会館	熊本市中央区花畑町4番18号	096-359-2020

コメント(中島)

熊本市は、熊本地震を経て平成27年度地域防災計画の「大幅な見直しを行った」といわれる素案に対して、平成29年4月8日から5月8日までのパブリックコメントを募集し、その後同年5月31日に地域防災計画会議で確定しました。しかし、当初の素案では外国人対策及び観光客への対策は、平成27年度地域防災計画と同じ文言のままでした。外国人への対応についてのパブリックコメントの意見を踏まえ、上記のように外国人の対応が大幅な補足修正がなされました。熊本市に関しては、当初の素案が熊本地震以前と全く同じ文言という何の反省もない驚くべきものでしたが、パブリックコメントを踏まえ、大幅な補足修正を行ったことは評価できます。しかし、発災時だけでなく1年以上経過したパブリックコメント公募時点でも、災害の外国人被災者対応を行う行政としての担当機関である政策局国際課が、防災会議だけでなく地域防災計画に参加や関与していないことが、明らかになりました。上記の計画を実働するためには、担当機関に災害時に外国人対応ができる責任と権限を与え、かつ対応できる能力と意志を持つ職員を担当させない限り、熊本地震の時と同様に紙の上だけに終わる危険性が強いと思われます。

**コムスタカー外国人と共に生きる会
熊本地震外国人被災者救援・支援活動 収支報告**

2016年4月15日～2017年6月30日まで

1 収入	1,689万円
現金寄付	46万円
銀行振込み寄付金	1,643万円
2 支出	1,131万円
(1) 炊き出しなど緊急救援活動	10万円
(2) 困窮被災者等への緊急融資資金	503万円
(3) 災害関連多言語情報提供活動	210万円
(4) シングルマザー30人への調査活動費	126万円
(5) 被災者の生活支援・人権相談活動	75万円
(6) 印刷費	119万円
(7) 郵送費	29万円
(8) 謝金・交通費補助	35万円
(9) 備品購入	20万円
(10) 事務経費など	4万円
3 2017年6月30日 現在の残金	558万円

※残金については、災害関連多言語情報提供活動費や生活困窮者救援支援活動費など、熊本地震外国人被災者への中長期の支援活動基金として活用させていただきます。

熊本地震被災外国人シングルマザーに対するインタビュー調査

2017 年 7 月 9 日発行

編集・発行 コムスタカー 外国人と共に生きる会

〒862-0950 熊本市中央区水前寺 3 丁目 2-14-402

須藤眞一郎行政書士事務所気付

TEL. 096 - 383 - 4136 FAX. 096 - 285 - 3411

E-mail: groupkumustaka@yahoo.co.jp

制 作 くまもと障害者労働センター

